

西夏語研究と法華経()

西夏文写本と刊本(刻本と活字本)について

西田龍雄

序言

西夏語の研究は20世紀後半に至って各国の研究者の努力によって格段に進歩した。それでもその言語構造の全容は隅々まで十分に解明され復元されたわけではない。西夏研究全体とともにまだ研究途上にある。しかし、多面の領域を含む西夏学は、今後急速に発展するであろう。

多量の西夏語文献に記録されたこの言語は、記録の媒介とした西夏文字を通してしか知ることができない。その書写体系自体にもまだ未開拓の部分が残っているのである。

1036年に西夏文字は李元昊の命で公布された。文字公布の事実は確かに中国の史籍に記録されているが、¹⁾具体的にどのような形で公布されたのか、その実態には全く触れていない。今日の我々の感覚からいうと、例えば6000字ほどある全体の字形が漢字と対照された形でどこかに公示されたとか、或は書物の体裁を取った文字資料として政府の各機関に配布されたとか想定できるけれども、その実体は全く分からず、推測するより外はない。

まもなく李元昊は蕃漢二学院と称する機関を設置して官吏に西夏文字を教え、国人の記事にはその文字を使うよう命令した。²⁾まず『孝経』『爾雅』『四言雑字』を翻訳させた記録にある。その中、『孝経』と『四言雑字』は今に残っている。しかし西夏文字が一般に広がって民衆の一部が使いはじめるまでには一定の日時が必要であったに違いない。やがて西夏文字は西夏人の社会生活の中に浸透し、使用範囲も拡張され西夏王国の文化を十分に特色づけるものとなる。

河西時代200年を通して、『法華経』『華嚴経』をはじめとする諸仏典の翻訳、

『論語』『孟子』などの中国古典の訳、³⁾西夏文学(詩集)、格言集、『三才雑字』などの単語集、『文海』をはじめとする韻書類、『天盛旧改新定律令』などの法律書、貸借文書、医薬書、曆書、占卜書など多種多量の文献を書き残した。とくに草書体文字で書かれた多量の貸借文書の存在は、一般民衆の間でこの文字が十分に普及していたことも物語っている。⁴⁾

また西夏国内では印刷技術が想像以上に発達していた。重要な書物は彫版もしくは(木)活字印刷の方法で刊行していた。活字印刷は限られた字数の西夏文字の印刷に最適の方法と考えられ、中原に先駆けて早い時期から試行されていたらしい。活字印刷された経典類は数多く現存している。

政府は印刷のために紙工院と刻字司を設けた。数名の頭監を任命して印刷事業を統括させ、儒家典籍と仏教経典を優先して、漢文と西夏文で印刷した。印刷の対象はそのほかに蔵文典籍にも及んでいた。⁵⁾

西夏語文献の出土と管理

現在、西夏語文献を所蔵する機関は、世界各地を見て数多くはない。仮りにその所蔵量の多寡を大雑把に目算して多い順に並べると、ロシア、英国、中国、ドイツ、日本、スウェーデンとなる。所蔵品の分量は様々であるけれども、いずれも20世紀に行われた発掘によって出土したものである。まず発掘の年代と地点及びその出土文献が各機関に納った経緯について管見の及ぶ範囲で簡潔に述べておきたい。

一 北京で発見された八冊本『法華経』

この八冊本は白塔のそばで見付けたとも伝えられるが、筆者はおそらくいずれかの寺院に保管されていたものを北京の古書肆が入手し、当時在京の外交官に譲渡したものではないかと推測している。最初モリスがその中の3冊を、そして在朝鮮のフランスの通訳官のベルトーが3冊を入手した。モリス本は一時期ペリオの許にあったが、のち他の2冊を加えてベルリンの国家図書館に納められた。⁶⁾ペリオはそれをハノイで写真にしてその一部を日本に持ち来り、京都で羅振玉と羅福成に見せたという。⁷⁾1913年京都東山社印刊行の羅福成の『西夏訳蓮華経考釈』には写真が3枚ついているが、ペリオからの写真とは書

いておらず、羽田亨博士より贈られた写真と述べている。⁸⁾他方もともと3冊あったベルト一本は、ハノイの遠東学院を経てパリのミュゼギメに納まった。石浜純太郎は1924年に渡欧した際、ベルリンでその法華経本を見て所蔵本5冊の巻数を同定しているが、⁹⁾ミュゼギメ蔵本については全くふれていない。当時まだ納っていなかったのかも知れない。不思議なことに、筆者の手許に全八冊の巻首の「説法図」などの写真のコピーがある。

二 黒水城出土文献

A ロシア・コズロフ探検隊収集本

1908年から翌1909年にかけてコズロフ(Kozlov)が率いるロシア皇室地理学探検隊は前後3回にわたってハラホト(黒水城)を訪れている。2回目に城の西北にあった古塔(スブルガン)の中に、かつての図書室を掘り当てた。西夏文の写本・刻本・活字本を含む総計数千点に及ぶ文献が出てきた。それを40頭のラクダに載せてロシアに持ち帰り、エルミターージュのアジア博物館(後の東方学研究所)に保管した。この貴重な収集品は黒水城の地下の永い眠りから目覚めて後、学界に公開されることもなく、再び博物館の一隅で眠りに入ったのである。『孫子』『文海』『新集錦合道理』(格言集)『天盛律令』『類林』(類書)など数点の重要文献はロシアの研究者によって漸次研究され、その成果はテキストとともに1979年以来公開されてきた。その後、中国の研究者はその成果を修正する形で受け継いだ。また若干の文献は各国の学者の手によって次々と紹介されていったが、残りの文献の中核をなす仏典類は近年詳細な目録が1999年に日本で刊行されたものの、各仏典の詳しい内容は不明なまま今日に至っている。¹⁰⁾

ソビエト崩壊後、幸いマイクロフィルムの形でどのテキストも入手できるようになり、また中国上海古籍出版社より『俄蔵黒水城文献』が刊行されて容易にその内容を知ることが可能になった。ただし既刊11冊の『俄蔵黒水城文献』の中には、西夏文仏典類はまだ含まれていない。

これはあまり知られていないが、現在北京図書館に所蔵される西夏文經典の中に、A (アジア博物館)の印がついている典籍がある。『大般若波羅蜜経』がそれであるが、これはコズロフ収集本の一部が、1957年に

ソビエト東方学研究所から北京図書館に移管されていたためである。¹¹⁾

B 英国スタイン探検隊収集本

コズロフの1、2回の発掘の後、1914年に英国のA・スタイン(Stein)探検隊も肅州(今の酒泉)から黒水城を訪れ、同じ遺跡を発掘し、残存文書と漢文古文書断片を含むかなり多量の収集品を得て、一部はインドのニューデリーに置いたが、主要なものはロンドンに持ち帰った。スタイン収集品は現在、英国図書館(The British Library)に保管されている。断片類が多いにも拘らず、コズロフ収集品にはない重要な文献が含まれている。

このスタイン収集本も『英国国家図書館蔵黒水城文献』として2005年以降やはり上海古籍出版社から刊行されている。全5冊刊行企画の中、現在まで4冊が刊行済である。¹²⁾

C 中国の発掘調査

1976年に黒水城を対象とした発掘調査が行われ、『同音』の断片8枚を得たが、その後1983年と翌年の2回にわたって再度黒水城の発掘調査が進められた。¹³⁾黒水城跡の上層の部分は元時代のものが大部分を占めていたが、下層部から西夏時代の文書を少量乍ら陶磁器の破片と共に見付けたらしい。西夏文断片は、『同音』の断片25片が出たほか、『新刻慈悲道場懺罪伝』ほか数点の仏典残片も出土したが、その分量など詳細は不明である。それらは現在内蒙古文物考古研究所に保管されている。

コズロフ探検隊はいわば偶然の発掘であって、コズロフ自身は西夏国の存在自体さえも知らなかったであろう。しかしスタイン以降の発掘は西夏文献を収集するという確かな目標のもとに行った調査であった。

D 清野謙次氏旧蔵断片集

清野謙次氏旧蔵の西夏文断片集は、昭和12年に北京で入手したものである。同氏が昭和13年に京都に帰ったのち、戦後にその断片集は天理図書館に納まった。清野はつぎのような覚書を認めている。

「寧夏省ハ甘肅綏遠兩省ノ間ニ位シ土地高燥ナリ。其省都黒城ヲ土言カラ、フォト khara-Photoト呼ブ。荒墟ノ義ナリ。本書収ムル所ノ古文書及ヒ古書ハ黒城附近流沙ノ中ヨリ発掘セラレタルモノナレドモ発掘時ノ状態ヲ審ラカニセズ、蓋シ黒城ハ往昔宋元ノ時代ニ於テ西夏ノ首都ナリ*。從ガツテ本巻中ニ至元年紀アル文書ト共ニ西夏文ノ古文書ヲ收藏シ得タルハ慥スヲ要セズ 余是等古文書類ヲ一括シテ昭和十二年末北京ニ於テ感得セリ。昭和十三年初京都ニ歸來セシ後、裝潢整理セシメタリ。今コレニ就キテ少シク説明ヲ加エ置ク可シ。……昭和十三年四月二十九日天長節 於京都記之」(*これは誤りである)

後年文字研究家中西亮氏が入手を試みた西夏文書(実現したか否か不明)数点はその残部ではなかったかと筆者は疑っている。その写真は筆者の手許にある。(後述)¹⁴⁾

三 敦煌窟出土文献

A ペリオ収集本

1908年の調査でペリオは莫高窟17洞(いわゆる藏経洞)から多量の漢文文書をパリに持ち帰ったことはよく知られるが、莫高窟181と182窟でも西夏文仏典断片を得たようである。しかし、その調査の詳細についてはいまだよく伝わっていない。また敦煌北区石窟でも西夏文献を得てパリに持ち帰り、それらは現在は仏国家図書館(Bibliothèque Nationale)に管理されている。

ペリオは早い段階で漢文収集品の中に管主八の大蔵経を沙州文殊舍利塔寺に施す願文があることを発見し紹介したが、¹⁵⁾西夏文献については全く言及していない。1920年代にパリを訪れた石浜純太郎もペリオ収集の西夏文を見ていない。¹⁶⁾しかし、実際にはペリオ収集の中に西夏文献は存在したのである。筆者は1970年にそれを調査したことがあるが、完全に整った典籍はもとよりややまとまった残巻類もなかったと記憶している。¹⁷⁾その後、松沢博氏はマイクロフィルムから全体の目録と經典名の同定作業を進めている。¹⁸⁾

B 張大千旧蔵本

1941年から43年まで敦煌壁画の模写に従事した¹⁹⁾画家の張大千氏は、徐ラマ(俗名漢卿)などに指図して北区の石窟を盗掘させ豊富な文献を得て、日本

及びアメリカに流出させたと批難をあげている。その中、西夏文献は日本の天理図書館が購入した。現在「敦煌遺片」と題して台紙に直接貼付けたアルバムのような状態で納まっている。

筆者は張大千旧蔵本を第一種、第二種、第三種に分類した。²⁰⁾ その中第三種は草書体で書かれた経済文書が主体を占めていたので容易に解読ができない。第一種と第二種は楷書体の版本であるが、ほとんどが断片である。しかし重要な經典も含まれていた。1. 大方広仏華嚴經、2. 金光明最勝王經、3. 慈悲道場懺法、4. 仏頂心觀世音菩薩陀羅尼經、5. 地藏菩薩本願經などは西夏語に訳された著名な經典であるが、そのほか經題はもとより前後を欠いた断片がほとんどである中、6. 聖無量壽宗要經や7. 聖摩利天母總持といった他の収集本中には見出せない重要な經典も含まれていた。²¹⁾

C 敦煌文物研究所と中国科学院民族研究所の調査によって出土した文献

1964年に上記2研究所の共同工作によって、敦煌石窟の再調査が進められた。²²⁾ その結果、莫高窟の中の西夏題記のある石窟の数がそれまで数ヶ所とされていたのが一挙に百ヶ所余りとなり、敦煌も西夏研究の対象に加ったとその調査の主動者である史金波は述べている。

その後莫高窟北区の発掘が進み、残片が多いけれども重要な西夏文献が出土している。その内容は上述した張大千旧蔵の「敦煌遺片」と同じ種類のものがあって、いみじくも日本天理図書館張大千旧蔵の諸断片が敦煌北区の出土品であったことを証明しているように思える。

1. 金光明最勝王經卷五封面の題字11字 (B 53窟)²³⁾
2. 大方広仏華嚴經卷二封面の題字12字 (B 53窟)
3. 金剛經残頁 (B 121) / 下半部のみ残る六行分の残片 (經名不詳) (B 53窟)
4. 劉宋求那跋摩訳 龍樹菩薩為禪陀迦王說法残頁 (經末に上掲 (p. 5) の長方形の枠に入った管主八の願文 (漢文 2 行) が捺印してある)
5. 地藏菩薩本願經残頁 (4 紙 B 59窟) (3 紙 B 159窟)
6. 種咒王陰大孔雀明王經残 6 行
7. 諸密咒要語残頁 (B 121窟)
8. 世俗書 i 新集金碎掌置文残片 (B 56窟) ii 三才雜字 (465、B 56、B 184)

iii 番漢合時掌中珠残片（B184窟）

そのほか籍帳、契約文など社会文書も出土したという（いずれも史金波の同定による）。これらの社会文書も張大千旧蔵第三種の文書と一連のものである。

四 寧夏靈武県出土文献²⁴⁾

A 北京図書館蔵本

1917年に寧夏靈武県の知事であった余鼎銘が靈武県城を修城した際に、城牆内に二箱分の西夏文献を掘り当て、寧夏鎮守使署に送った。その一部分は当時の地方官が細かに配分したため各地に散佚してしまったが、大部分は北京に運ばれた。1929年に北京図書館は当時としては多額の費用を投じてそれを購入した。現在北京図書館に所蔵される西夏文經典の大部分はその時に納まったものである。1931年に周叔迦はその目録（書誌学的概説）を『輔仁学誌』（第二卷二期）に出し、翌32年に『北京図書館刊西夏文專号』にその詳しい目録も出している。前者は近年刊行された周叔迦の『周叔迦仏学論著集下集』に収められている（pp. 732-741）、（中華書局）1991年刊。[追記参照]

B 日本京都大学所蔵本11冊

『大方広仏華嚴經』が計11冊京都大学に所蔵されている。巻一～巻五は文学部に、巻六～巻十と巻三十六は人文科学研究所（旧東方文化研究所）にそれぞれ納まる。北京図書館所蔵本と同種の木活字本であって刻本ではない。これは元和邵氏の旧蔵本と知られるが、京都大学に納まった経路は不詳である。帳簿には記録されていない。²⁵⁾

C 甘肅張思温蔵本5冊

甘肅の張思温氏の許にも木活字本『大方広仏華嚴經』が所蔵される。巻十一から巻十五までの五巻で京都大学所蔵本に続くものである。²⁶⁾

五 甘肅省武威県出土文献

1972年1月に甘肅省武威県（天梯山石窟と張義下西沟峴）から西夏遺品と共に

西夏文仏典と俗文書が発見された。²⁷⁾しかし分量は多くはない。1. 仏説觀弥勒菩薩上生兜率天經の後半部、2. 三才雜字の一部、3. 医藥書(楷書)、4. 会款单、占卜書(行書)現在それらは甘肅省博物館に保管されている。

黒水城以外の西夏故地から大量の文献の出土が期待されてきたが、その後、後述する拜寺口方塔文献のほかは大きな成果は出ていない。

六 元刊本西夏大蔵經残卷

スウェーデンの首都ストックホルムの民族博物館に「白上国新訳三蔵聖教序」と題する序文のついた、おそらく元刊大蔵經と考え得る一連の經典が所蔵されている。具体的に言うと序文のほか次の經典が残っている。²⁸⁾

1. 仏説月光菩薩經(大正 166)
2. 仏説了義般若波羅蜜多經(大正 247)
3. 聖無能勝金剛火陀羅尼經(大正 1236)
4. 毘俱胝菩薩一百八名經(大正 1114)
5. 仏説菩薩修行經(大正 330)
6. 大方等無想經第六(大正 387)

そのほか下半部のみ残る經題不詳の断片、A、B、Cの三種類がある。西夏字の函番号がついている。これは西夏国滅亡後に印行された元刊西夏大蔵經のもっとも最初の函に収められていたものに違いないと考えている。杭州万寿寺で印行された元刊本の実体を実証する極めて重要な資料である。

巻首には八折分の説法図と祝讃牌があり、牌の中には次の讃辞が書かれている。

1. 世祖聖徳神[功] 文武皇帝賢[刻]
2. 今上皇帝賢[印]
3. 天威聖盛仁慈愍[明] 寿先皇太后[賢印]
4. 宮正皇后 賢印

この讃辞から世祖が彫版を命じ、今上皇帝(成宗)、皇太后、皇后が印に付して出来たことは明らかであり、元史に記載されるごとく、もと世祖が河西の蔵經版を作成させ、成宗が即位するに及んで至元三十一年十一月丁巳(1294年)にその作成を罷めさせたが、その後まもなく杭州の万寿寺において継続させて

出来た版木によるものと考えて差支えないと思われる。

七 銀川市拜寺口方塔出土文献

西夏国の故都・興慶府にあたる現在の銀川市で1991年に拜寺口の方塔から『吉祥遍至口和本統』9冊ほか数種の仏典が発見された（これは木活字本）。この『吉祥遍至口和本統』はこれまでに知られていない論典であって貴重な発見である。²⁹⁾ そのテキストは2005年になって公開されたが、その研究はまだ公表されていない。³⁰⁾

黒水城出土文献の中コズロフ、スタインの二大収集品は、もともと巻首と巻尾を欠くテキストが多いため、序や跋がなく紀年も分からない書物が多いのであるが、上述の種々の出土文献の中にあつて、質量ともに抜群の価値を持っており、西夏王国の文化そのものを代表していると言い得る。³¹⁾

西夏王国四代皇帝・崇宗（1086年～1139年）、五代皇帝・仁宗（1139年～1193年）の時代には訳経活動が最も盛んであり、それに伴って印刷事業も特に活発であった。

西夏文刊本の種類

西夏文の刊本には、刻本と活字本がある。前者には官刻本、私刻本（坊刻本）と寺院刻本の三種類があり、後者には泥活字本と木活字本があった。

A 刻本 1) 官刻本

官刻本は、西夏政府の刻字司において彫板され印刷された書物で、用紙も国内で造っており紙工院が管括していた。西夏国の行政組織が上・次・中・下・末の五等級に分けられる中で、刻字司と紙工院は末等司にランクされ、『天盛律令』には次のように規定されている。³²⁾

天盛律令（巻十）末等司：三種一律四頭監：木工院 磚瓦院 紙工院 二種一律二頭監：刻字司 織絹院（史金波等訳 p. 371）

即ち、刻字司は2人の頭監が管括し、紙工院は4人の頭監が管括することになっていた。そして刻字司頭監には番大学院の学士がその任にあてられていたことは『大詩』などの跋からもわかる。³³⁾

『大詩』 乾祐乙巳十六年四月朔一日

刻字司頭監 御前金唐管高 御史正 番学士 呂郎文茂(𪛗𪛘𪛙𪛚)等

刻字司頭監 番三学院百法博士 坐主

骨勒善源(𪛗𪛘𪛙𪛚)

筆持和尚 劉 法澤(𪛗𪛘𪛙𪛚)

『礼詩文』『大詩』『月々楽詩』『道理詩』『智慧詩』は一冊にまとめられ刻字司から1183年に刊行された官刻本である。³⁴⁾

『同音』と『文海(宝韻)』は西夏文字普及のために編纂された字書と韻書であったから、当然政府の刊行物であったと考えられる。『文海』は序も跋も散逸しているため、刊行の事情が記録されていないが、『同音』(旧版)には序も跋も残っていて、刊行の経緯が記されている。跋の方は、末尾の紀年の3行の中一行が欠けるのみでほぼ全体が現存する。『同音』(旧版)の跋を訳してみる。

「今の(西)夏文字は、祖帝の世に搜すに易く、隆盛を願う故に、刻字司が造りたるもの(なり)。(西)夏学士等が頭監となり印面を雕して、世間に領行せるものなるも、のち彫工印者と非局員等が微利を求めんがため通し、書場(出版所)を開き、更に院を移し造りたるも、彼れ亦、字を知らず正すことも能わざるにより、印面は首尾欠落し、偏傍は混雑し、学者も昏迷しおる也。私儀見て心安らかならざるにより、善く善く校し終えたり。先の雑多きものとは似ざると雖も、目心^{あま}普ねからざるにより、微かに随わざるところありても、智者は嫌う勿れ。徳治(=正徳)壬子六年(1132年)十月二十五日受了」

1980年の調査によって、筆者はコズロフ収集品No. 208の中に、新版『同音』のはじめの部分第一葉から第四葉にあたる部分が含まれていることを知り、その第一葉が新版の序であることを発見して、1981年にその録文を拙訳とともに公表した。今その訳文を改定して次にあげる。³⁵⁾

『同音』(新版)序「さて同音は、はじめに切韻博士hleŋ(?) riur kh^{wi} pu と mbar kiŋ pu (𪛗𪛘𪛙𪛚𪛗𪛘𪛙𪛚)等が興したるもので、のち新字が増加し(たため)学士xən phïow wiŋ mbiu kh^{wi} fi mbie (𪛗𪛘𪛙𪛚𪛗𪛘𪛙𪛚)等が新字を含めた別の同音一本を造りたり。是くの如く旧新二類各自 彼の節親主(𪛗𪛘𪛙𪛚) 嵬名徳照(𪛗𪛘𪛙𪛚)夏文に基^{くわ}だ慧しく、旧版に雜有り、新字も別

に生まれるを見るに随い(割注:原序の中に「先集微に混る」等の四句也)そこで(学)士兀羅文信(𣪠𣪠𣪠𣪠)を招き、旧新を総合せる一部を造る。(割注:『三才』の序の中に「大臣は悲しみを発し」の四句(ある)也)今、是の本が^{それ}実也。それ亦、配慮普からず、学識深からざる(により)徳育是の文を見て、雑乱たるを(憂い)、『文海宝韻』と詳かに比べ、「手鏡」(𣪠𣪠)と韻調類をよくよく校(正)したり。³⁶⁾忘失を正したるのみならず、新造字も増したり。優れたる君子はこの書を検するとき、識嫌を起し給うこと勿れ。増減する理は(以下欠)

『三才雑字』の序を見ると「大臣は悲しみを発し」の四字は確かにあり、その前後は次のように書かれている。

「詩文の如き弁才は皆肯んず、のちまた大臣は悲みを発し(𣪠𣪠𣪠𣪠)、「同音」を彫(版)したり。旧新(本)を集め、平上を正せり。国人は心を専にし学ぶべき実(𣪠)也、嗚呼(哀哉)(𣪠𣪠)村落の人は、春時は地を耕し、夏日は大地を鋤で耕し、秋期は(果を)摘みとり、冬には縁が宿る。四季皆暇ならざる中、また文に多義無きことを学ぶべし。何ぞ閑なるは愚かならん。

これらを慈愍により要に向けて刪し、「三品雑字」を造りたり。これ三才に随い設けたり。文に識ある君子は、この文を見る時、文の故に志を従わせしめること勿れ。未だ足らざるは^{うた}転後人が増減されんことを望む。雑字一品、上天第一……」と書かれている。

『同音』は西夏字の標準字形そのものを示し、『三才雑字』(『三品雑字』が正しい書名か)は意味部門に分けて常用単語を『同音』から節略して編纂した用語集であった。

さて『同音』旧版の跋と新版の序を勘案すると『同音』は前後五種類刊行され、次々と改訂されていった経緯がよく分かる。そして『同音』旧版と新版の間に『三才雑字』が彫板されたらしいことも判明する。

1. 切韻博士 hlefi riur khwi pu 等が造った刻字司初版本
2. 刻字司以外の人物が発行した非官刻本
3. 学士 xən phïow wiñ mbïu khwiñ mbïe 等が造った改訂本
4. 節親主嵬名徳照が学士兀羅文信を招いて整理した増加本 = 旧版『同音』
5. 梁徳育が再校した再校訂本 = 新版『同音』

それ以降に新しい改訂本が造られたか否かは確認できない。

新版『同音』が世に出た時には、『三才雑字』はすでに存在したように思える。『同音』新版の序に「『文海宝韻』と校勘し、韻調類を詳しく校正した」とあるのは『三才雑字』の序に「『同音』旧・新(本)を集め、平上を正せり」とある内容と一致し、更に新版『同音』の平声韻字と上声韻字を別々の小類に整えたという最も重要な新版の特徴と合致している。

旧版『同音』は跋に記されているように、正徳壬子六年(1132年)に刊行された。一方新版『同音』には紀年はないが編者梁徳育は1176年に卒したから、天盛あるいは乾祐時代の刊行で旧版が出てからあまり時を経ずして発刊されたものと考えられる。³⁷⁾

コズロフ収集品『三才雑字』(Cat. 23, No. 2535)は写本であるが、明らかに刊本の手抄本であり途中で筆を置いている。かなりの後代の物らしく、字は拙劣である。Cat. 19の雑字はいずれも刻本で種類は多いが序は残っていない。或いは『三才雑字』の編者も梁徳育であったかもしれない。もちろん官刻本であったと考えられ、数度も版を重ねたことであろう。

『同音』新版には原序(龍龕讎)として『同音』旧版の序を納めている。しかし旧版の序にあった収録字数大字六千一百三十三、注字六千二百三十三という字数は省かれている。先年筆者が偶然に発見した新版『同音』の跋にあたる小断片には、「同音一類 終 通数(總数)大字五千八百四 注字六千七百一」と記載されていた。旧版に比べると、新版の収録字数は三百字あまり減少している。旧版刊行以降字形を整理し希用字を削除したものと見える。³⁸⁾(No. 6183)

類書の一つ『類林』も、西夏の百科全書にあたる『聖立義海』も官刻本であった。『類林』巻四の末尾に、乾祐辛丑十二年(1181年)六月二十日刻字司印と明記され、『聖立義海』巻一の巻尾には、「乾祐壬寅十三年(1182年)五月朔十日刻字司より(堯)新に起し印行す(龔)」と記されている。

これらの2本は、上述の大詩などを含む詩集に先立っていずれも刻字司から相次いで刊行されていたことになる。

筆者はそのほか同じく梁徳育の編である類語集『同義一類』も刻字司の刊行物ではなかったかと疑っている。コズロフ収集の一本(Cat. 24, No. 2539)は写本であるが、刊本を手抄したものであり、前半は欠けている。スタイン収集本

の中に、先年毎頁の右左下部分にあたる三角形の型で残る小断片を見付けたが、³⁹⁾近年コズロフ収集本の中にも数葉の刊本残片があることを発見した（No. 7562 蝴蝶装 8 葉分にあたる）。

No. 2539の奥書きは、次のようになっている。⁴⁰⁾

「同義一類 終 和尚 梁習宝書
乾祐戊申十九年三月十五日（1188年） 終
校勘し事を正す者御史承旨西夏学士 梁徳育
書写する者 ʔɔŋ tshien₂（慈嚴）舅榮勢」

刻字司の名は記されていないが、刊本の残片を見ると、『(三才)雑字』の体裁に酷似しているから、刻字司刊であった可能性は大きい。

乾祐年間は、刻字司刊行の官刻本が多く普及した時期であった。

『徳業集』（徳行集）も多く流布した書物である。筆者は先年その内容の違いから、甲本乙本丙本の3本に分類した。⁴¹⁾甲本（No. 799）には表題のあとに「西夏大学 正教授 曹道楽 訳し伝える」とあり、中国の若干の文献から訳して集めたものらしい。蝴蝶装（活字本）で 四葉にわたるその序文は西夏人が書いている。その序の最後の部分を訳しておこう。

「・・・・この故に師学より起し、政立に至る。分けて八品となす。先代の言葉を引き本となす。名づけて徳業集と謂う。畏みて書写す。龍座のご前に昇り唯だ願うは、皇帝閑居の折にご閲覧給わらんことを求む。譬えれば山坡に塵が積り高くなり、河江に水が集るにより大となるが如く、若し人のため言を捨てず、聖知の万分の一なりとも増すもの有らば、則ち唯だ臣らの福のみならず亦た天下の大福となる也。臣節親 ʔyĩʷan wafɨ（黠𧄨）詔を奉じ畏みて序す」

甲本（No. 799）全体の末尾には「徳業集 竟」とあってそのあとに、

「印校を發起する者・夏大学院 wĩe 除（黠𧄨）学士・𧄨龍 信照

印校を發起する者・夏大学院正教学士・呂ndufɨ（𧄨𧄨）文ト（𧄨𧄨）

印校を發起する者・夏大学院正監学士・節親、文（𧄨）」

という西夏大学院教授など3名の名前が記されている。⁴²⁾おそらく刻字司よりの刊行書であつたらう。

『徳業集』(乙本) No. 146はやはり蝴蝶装で刻本であるが、葉数は漢字で示され、略題はなく版心に徳業集と彫されている。第一葉右の巻首にあたる部分が欠けるため、書名は分からないが末尾に「徳業集一卷 竟」とあるから、徳業集の一つであることがわかる。しかしその内容は上述の甲本(No. 799)とは全く異なる。第一葉右が欠けるのみであとの十葉は完全に残っている。半番6行、1行13字。序も跋もなく紀年もない。

始めに君子の持すべき道として二十五業を説き、「君子たる者、三才を知り、六芸を悟り、五美を敬い、四悪を断ち、三惑を除き、九思を起し、四知を怖れ、三鏡を視る(べし)」とあって、三才・六芸などの用語を割注の形で解説している。例えば三才は 讎 讎 讎 (天地人)、六芸は 隰 冚 隰 隰 隰 隰 (礼楽射御書数)のように、漢語の直訳である場合と、五美(五妙と訳す)や四悪、九思のようにかなり自由に解釈している場合がある。例えば四悪の第一悪「不教而殺」は 繡 綖 綖 綖 綖 綖 「始めに教示せず後に傷殺する」と説き、第二悪の「不戒視成」は 繡 隰 綖 綖 隰 隰 綖 綖 綖 綖 「始めに制せずして後に功成らざるを有罪となす」と解説する。また第三悪の「慢令致期」は 紱 紱 紱 紱 紱 紱 隰 隰 綖 綖 綖 「口で譬え信なく、期する(nu(上4)量る)所に来ない故に他を害する」と訳し、第四悪の「猶之与人也、出内之吝」は、 繡 隰 綖 綖 隰 隰 綖 「財を持ちながら惜み施捨しない」に替えている。訳文には文字面では原文の 虐 暴 賊 有司にあたる言葉は使われていないが、四悪業の内容は伝っている。いずれも『論語』堯曰第二十にある言葉である。

最後の個所に「この我が略説せる語は身を立てる根本也。徳業集一卷 竟」と述べ、そのあとに「この徳業集は根に於て漢(本の訳)也」と記している。これは官刻本であったのか否かはわからない。

『六韜』や『黄石公三略』⁴³⁾も刻字司刊行の官刻本であった可能性は大きいだが、その記載がないため確証は難しい。

2) 私刻本(坊刻本)

西夏の出版事業は政府が管轄していたため、私刻本の刊行は多くはなかった。中には官刻本の複製版も出ていたらしい。それらの出版書舗はよく記録されていないが、おそらく興慶府(中興府)のどこかで彫版され刊行されていたもの

と推測できる。黒水城付近にもその種の書舗があったかもしれない。

私刻本の代表としてまず著名な『番漢合時掌中珠』をあげることができる。その表紙の書名の下に「茶坊角面西 張・・・・（以下くずれる）」と残るのが出版元であった。残念ながら印刷した時に文字がくずれていて判読できない。現在サンクト・ペテルブルクの東方学研究所では、蝴蝶装の一枚一枚が裏打ちされてばらばらに保存されていて、本来の掌中珠の形態はそれから復元できないのである。庚戌二十一年（乾祐二十一年 1190年）の紀年のある版は、「此掌中珠者三十七面内更新添十句」（漢文と西夏文が対照される）がついている増訂本であり、1190年以前にすでに数度印行されていたものと考え得る。

漢人と西夏人が雑居した地域では、漢人にとっても西夏人にとっても、この書物は有用であり需要も多かったと見えて、全部で六種類の刊本が残片ではあるが現存する。天形上、地形上、人形上の替りに人体上となる版や、小見出しの項目、天形上などの西夏文字・漢字を花形で飾った版やそうでない版など数種類がある。

その編者は、序文を書いた西夏人・骨勒茂才であったが、茂才の経歴などは今のところ知る由もない。

格言集である『新集錦合道理』もよく流通した私刻本であろう。これは西夏の社会生活を知る上で貴重な情報を提供する書物であるが、コズロフ収集品にはその刊本が一つ残る（Cat. 35, No. 765）。蝴蝶装で多少くずれてはいるが、序のほか跋もついている。スタイン収集品の中に手抄本があって、幸い序の前半に該当するところが残っており、コズロフ本のくずれて判読困難の場所をそれから補って読むことができる。この書はもともとは御史承旨 番大学院学士・梁德育が編纂したもので、德育の没後、切韻博士・王仁持が増補したものであることがその跋からわかる。

乾祐十八年（1187年）褐 商舗に梁が印行を依頼す（爰口鞞 併菟鞞）。最後の文字はよくわからないが（印行を）依頼したの意に解しておく。この一行は書舗名と発願者名を記したものに違いないが、その実体は詳かではない。
44) 『新集錦合道理』の印面はなかなか美しい出来上がりである。

河西版（西夏版）漢文仏典には私刻本が多くあった。⁴⁵⁾ 『夾頌心經』（大般若波

羅蜜多經)(TK. 158, M. 175) が、その中でもっとも早期の版本として知られる。恵宗の天賜礼盛国慶五年歳次癸日(干支では1073年。年号によれば1075年)の紀年があり、信徒陸文政が亡父母の離苦得楽のため特に出資して、大般若経が靈驗あらたかなるにより、此の経を良工に依頼し彫板印行したとある。

因に西夏文大般若は四百巻まで漢訳から翻訳されたが、すべて写本のままで彫板されていない⁴⁶⁾。

仁宗の時代には漢文私刻本が特に多く、人慶三年(1146年)五月に『妙法蓮花経』七巻本が造られている(TK. 1, 3, 4, 9, 10, 11, 15, M. 67)。木刻折本であり、各巻は一書をなす。コズロフ収集本の中に現存する漢文『妙法蓮花経』刊本には、河西本、宋刻本、唐刻本がある。河西本(TK. 1~4, TK. 9~11, TK. 15)の内容は次のようになっている。(メンシコフ参照)

TK. 1 巻一 仏画があり、弘伝序、序品第一、方便品第二。序のあとに編者の署名「終南山釈道宣述」とあり、そして序品第一標題のあとに「姚秦三蔵法師鳩摩羅什奉詔訳」と記される。仏画の左側欄内には2行にわたって仁宗皇帝の称号「奉天顕道耀武宣文……」の記入があるから、このテキストが西夏仁宗時代の版本であることを示している。

TK. 2 巻二、第三品は鬘鬘無足より43行残り、第四品は、初より8行のみ残る。ただしTK. 15は巻二全品に当り、末尾に刻工者の姓名が記される。

TK. 3 巻三、第五、第六、第七各品全文。

TK. 4 巻四、第八、第九、第十、第十一、第十二、第十三の各品の全文。保存は極めて良好、末尾に敦苟埋^{ママ}の名がある。

TK. 9 巻五、第一紙は欠けるが、第十四(頭欠)、第十五、第十六、第十七の四品全文。保存は極めて良好、賀善海の名がある。

TK. 10 巻六 全六品全文有り、末尾に王善圓の名がある。

TK. 11 巻七 全五品全文と尾題のあと小字で題記があり、その末尾に紀年して大夏国人慶三年歳次丙寅五月(欠)(1146年6月11日~7月10日)とある。刻工者の姓名と刻印地も明記されている。「雕字人・王善恵、王善圓、賀善海、敦苟埋等同為法友特露微誠以上殿室御史台正直本 為結縁之首命工鏤板 其日費飲食之類皆宗室給之 雕印斯経……」西夏の皇室が費用を提供して彫刻人に彫印をさせ施行したことがわかる。

そのほか観世音菩薩普門品第二十五が三種類(TK. 90とTK. 105, 113(小型本)とTK. 138)あるほか、宋刻本(TK. 154~157)などと写本が多数残っている。中には唐写本、敦煌写本(TK. 188, 196, 325など)も混ざっているらしい。

天盛四年(1152年)八月に漢文(河西本)『注華嚴法界觀門』が刊行された。(TK. 241~242)これは卷子装にした刻本であるが、上下2巻に分けられる。巻上は題名(上半分は欠ける)[注華]嚴法界觀門序のあと(欠)州刺史裴休撰[住]持^伝法賜紫 遵式治(欠)とあり、法界上一紙は欠けるが法界上二紙から二十八紙まで(真空第二を含む)残る。巻下は前半が欠け法界下十四紙から三十紙まで(理事無礙觀第二、周徧含容觀第三を含む)まで残る。分科の体裁をとり上段は科に分け、下段は本文(大字)と注(小字)が並べられる。本文と注釈の部分は正大本No. 1884と一致するが序はない。巻上十三紙右端に[圭]峰蘭若沙門 宗密 注が残る。十四紙には京終南山釈杜順集とあり、杜順の経歴などを述べている。

巻下の尾題は(三十紙)大正No. 1884とはやや異なり、注略法界觀門(No. 1884は注華嚴法界觀門終とある)となり、そのあとに杭烏山沙門 智蔵注という署名がある。そのあと押韻した七言一句の偈が十二並びさらに各偈には小字で七言一句の語がそれぞれ四句ずつ注釈としてついている。最後にやや長い題記があり恭惟の一文がある。その中で、「唯だ注釈のみで分科しなければ無綱の綱であり、分科のみで注釈がないと無綱の綱であるから分科と注釈を別軸にした。相国裴公(=裴休)が序を造り、この法門を讚する者はすべて聖玄術に入ると謂う可きである」などと述べ、この伝典は邠州開元寺の僧西安州帰義・劉徳真がたまたま帝里にいた時、資金を出して工を集め彫板し、聖節の日になんで謹んで散施したという経緯を記し、最後に皇朝天盛四年歲次壬申八月望日(1152年9月15日)沔道沙門釈法隨勳縁及記と紀年している。このテキストも私刻本であった。

西夏語訳『注華嚴法界觀門』もコズロフ収集品中に現存する。(Cat. 395, No. 942)それは奇麗な写本で刊本はまだ見つかっていない。全一冊になっていて、その体裁も内容も上掲の漢文(河西本、大正No. 1884)とは異なっている。内容の大条は違わないが、分科はなく注釈が上掲本よりもずっと詳しい。西夏語訳本には、首尾にあたる部分が欠けるため、訳者名注釈者名などに関する情報は

一切得られない。しかしこのテキストを西夏語文献の一つと見た場合、文字に通常經典で使われる以外の特別な意味を与えていて、有用な研究資料となる。例えば、𐽀𐽁𐽂 (小見出し) 𐽀𐽁𐽂 主伴 𐽀𐽁𐽂 交渉 𐽀𐽁𐽂 広容 𐽀𐽁𐽂 局 𐽀𐽁𐽂 𐽀𐽁𐽂 𐽀𐽁𐽂 以一望多などの用法がある。⁴⁷⁾

先にあげた『徳業集』と並んで取り上げたいのは『賢智集』である。その内容はあまり知られていないが、一言で述べれば高僧の説教集である。数点の版本と写本が残るが、主なものはNo. 2538とNo. 2567とNo. 120とNo. 7168の4本である。

No. 2538は刻本(蝴蝶装)ではじめに説教の図がついていて、図には法器を置いた机の前に立つ一人の和尚と合掌する六人の聴法の衆が描かれ、左肩に𐽀𐽁𐽂 𐽀𐽁𐽂 𐽀𐽁𐽂 信畢⁴⁸⁾ 国師の四字と中央に 𐽀𐽁𐽂 𐽀𐽁𐽂 𐽀𐽁𐽂 法聴衆の三字がそれぞれ二重の囲みに入れて刻されている。

信畢国師はおそらく西夏の高僧であったと考え得るが、高僧伝中にその名は見えない。しかし同じゴズロフ収集品中に 𐽀𐽁𐽂 𐽀𐽁𐽂 𐽀𐽁𐽂 (上28) 𐽀𐽁𐽂 𐽀𐽁𐽂 𐽀𐽁𐽂 (平11) 国師集世勸 (TG. 428, No. 3706) があって、奥書には3行にわたって乾祐戊申十九年二月十五日の紀年(1188年)と印刻興起者 楊慧広と印面書者 𐽀𐽁𐽂 𐽀𐽁𐽂 𐽀𐽁𐽂 (羅鼓忠持) の名がある。

著名な西夏の高僧であった、この二人の名は、『賢智集』No. 2567のテキストに出てきて、序の中に信畢法顕国師と書かれている。

No. 2567も刻本であり、一枚(折本2頁分)のみ残る。次のような内容を持っている。

四十三葉 [右] 心ヲ造り能フナラバ 奚ソ仏ト成ラン
ことば ども
 四十三葉 [右] 言葉ヲ嘗吃リ文ト和スルニ非ザルモ
 意味少ナクトモ 得タルオニ随イ衆ニ勸メ
 修順ヲ説ク 是ノ善シキ聖帝ノ寿ハ万歳ナリ
 宝根ハ栄エ 法界ノ有情ハ余スコトナク皆 成仏セン
 賢智集

最後に四十三葉 [左] 奥書があり、紀年がある。

四十三葉 [左] 乾祐壬寅十九年二月十五日 (1188年)

彫印発起スル者 和尚 楊慧広 (徧 糺 糺)

印面御前筆持 羅鼓忠持 rar(平80) mbar(平80) tu(平58) ?iehi(平39) 書ス

『賢智集』No. 7168は写本であるが、No. 2538の手抄本(冊子装)であり途中まで残る。内容はNo. 2538と一致するが、No. 7168には誤写などが見られる。末尾は欠けるもののほぼ完本に近い。⁴⁹⁾はじめに

比丘和尚 楊慧広 謹序

皇城遠見司承旨 神鬼徳進 謹才

の2行が並び、その後14行の序がつく。(No. 2538と同じ)

ついで本題『賢智集』と作者名

大民渡衆宮 法顕国師 沙門宝源 才 (糺 ⁵⁰⁾)

が書かれ、全体は、九種の弁(釋)と二種の頌(徧)と一つの文(糺)、そして三種の驚奇(糺)からなり、⁵¹⁾最後に自在正見の詩(糺)がついている。

九種の弁の第一は、友ニ勸メル善修ノ弁とあって、次のような内容である。

「三更ニ独り座シ世事ヲ善ク善ク^{カンガエ}審察ルニ、

夜間眠ルコト無ク机上ニ^{シオ}萎レ黙ス。

四季ハ追カケ、日月ハ暫シモ休ムコトナシ

八節ハ易リ転ジ、光陰ハ少シモ停ルコト有ラス

春ニハ花ガ叢ガリ集リ、秋ニハ樹ニ鳥、葉ハ鬱蒼トナリ

夏ノ始メニハ敷^{ひろくゆきわた}行リ、冬ノ中ニハ灰色ニ枯レ朽ル

貧富ノ測リ難キコトハ水面ノ波浪ノ如ク

盛衰ノ定ラザルコトハ虚空ノ閃光ト同ジナリ」

ここまでは「金碎掌置文」を連想させ、そのあとは、「夏聖根讃歌」を思わせる文章が並んでいて重要である。⁵²⁾

慢^{あごり}ヲ勸ムルノ弁 讒^{つげくち}舌ノ弁 泣ヲ勸ムルノ弁 瓶宅ノ弁 (No. 2538ハココマデデ終ル) 酒ヲ怨フノ弁 色ヲ除クノ弁 物ヲ怨フノ弁 肉ヲ除クノ弁が述

べられ、各弁のあとに詩語、頌語などの名のもとに七言あるいは五言数句からなる詩、頌がついている。その中若干の句は押韻している。次に、安忍頌・五言四十八句と心患頌・五言三十六句があり、「・・・汝等それを悟り、次第に問う、智者が説かんとする俗(以下空白)」とあって、改めて「俗女ノ文」「凡ッ在家ノ俗女ハ罪過多ク、仏語ヲ詐諂(あざむきへつらう)スルコト男ヲ越エルト謂

ウ。・・・・・・」

三驚奇は第一第二第三と続くが、第三の内容は第二と同じで重複して書いている。(以下は欠ける) 2つの話があり、例えば「二驚奇ハ六趣衆生千万部、若シ楽有ル時、色ハ無シ 有ト無ハ同ジカラザルモ識ハ一様ナリ。怒ル時ハ目ヲ瞪リ復タ槌チ縛ル、喜フ時ハ遊ビ 。昼ハ活キ夜ハ死ス。甦ル時、各自ノ屍ヲ担キ行ク。此等ハ後ニ停リテ動揺セズ・・・・・・」のような奇怪な文章が綴られていて理解しにくい。それに続く「自在正見ノ詩」は「沙門釈子正見ヲ蔽シク悟ルモ見根ニ於テ見ルトコロ無シ。惑エバ即チ正見モ邪見トナル。悟レバ邪正皆一様ナリ。或ハ清浄、或ハ染著、根ニ於テニナラズ一真ナリ・・・・・・云々」と説いている。

賢智集は以上のように興味深い内容をもったテキストであるが、おそらく私刻本であったと考えられる。

亡父母供養のための私刻本断片

私の手許に文字研究家・故中西亮氏から頂戴した西夏文の写真が数枚ある。その中の一つに本文は散逸し最後の識語にあたる部分のみが残る小断片がある。何経の後に付けられたものか今では分からないが、識語には版彫印行の目的と施主および紀年が記されている。

天慶丙辰三年 月 日畢(1196年)(桓宗の時代)

父母ト法界有情等ノ利ノ爲ニ 楊慧茂 謹ニ施ス

発願シ施ス者 浄信弟子 楊宝幢

印面ヲ書ク者 御前筆持 李阿現(麥糶蕪)

彫字スル者 梁宝和(靴糶蕪)

と明記され、この經典が楊家一族が亡父母供養のために造った私刻本であることを示している。その子、楊慧茂と出家した楊宝幢が発願し印刻施行したものであろう。現存する西夏仏典の中でこの種の識語は珍しい。ほかに五本調者説奏とのちの書き込みが五字あるが、くずれていてよく判読できない。

この実物は某氏が所蔵したものであるが、中西亮氏が譲り受けを願って交渉中に接写したもので数枚まとめて筆者は中西氏から頂いた。このほかにも一枚極めて重要な断片が含まれている。西夏文字の行間に某言語が書き込まれたもので、この種の經典の存在はこれまで世界中どこにも報告されていない、き

わめて珍なるものである。中西氏は、実物の所有者を明かさなかったので、残念ながら今この実物がどこにあるのか不明である。⁵³⁾

西夏国で発刊した河西本漢文經典にも私刻本は少なくない。例えば『聖六字増寿大明陀羅尼經』がそうである。(TK. 135, M. 155)⁵⁴⁾ その經には尾題のあと五行の題記があって「右願印施此經六百卷資薦/亡靈父母及法界有情同往/淨方/歲大夏天慶七年七月十五日/衰子仇彦忠等 謹施」(西天訳經三藏朝散大夫試鴻臚/卿伝法大師臣 施護奉 詔訳)とあるように衰子仇彦忠が亡父母供養のためこの經典六百卷を彫印散施したことがわかる。同じ經典の西夏語訳文も現存している(TG. 234, 236, No. 910, 570は写本、No. 8048は刻本(折本))。クチャーノフ1999年目録 p. 429

3) 寺院刻本

西夏語への訳經業は景宗(李元昊)の時から始められ、毅宗、惠宗、崇宗と続く1038年から1140年頃までの四代にわたる時代にその基盤は固められた。国師白法信、三藏安全国師、沙門白智光等32人に命じて開宝蔵により訳經事業を進行させた。⁵⁵⁾ 大小三乗362帙820部3579巻を訳出したといわれる西夏大蔵經のはしりである。いずれも寺院刻本であった。西夏の寺院印經には二つあった。その一つは皇帝の重大な法事活動を遂行するために仏典を印行する。もう一つは寺院が仏法を弘揚する事業として仏典を印行する。しかし印經の規模と数量に大きい差があった。

崇宗に続く仁宗の時代には訳經事業は最高潮に達した。天盛十九年(1167年)には仁宗は皇太后の周忌に因んで既に開板印造した『仏説聖仏母般若波羅蜜多心經』は番漢本共に二万巻を印刷したという。その西夏文は写本刊本ともに数種類現存する。(TG. 70-77) No. 4336は写本であるが、蘭山覚行国師沙門德慧(繼龜)奉詔訳とあって、訳者名が記されている。1999年目録 p. 291-

No. 7036は刻本(折本)であるが、識語の中に

印面ヲ彫起スル者 前内侍 kīε kīən 巫(辨纏龜龜毘駱)

印面ヲ書ク者 羅鼓邪神瓦(禿禿禿禿)

天盛乙酉十七年八月朔一日(1165年)⁵⁶⁾

のように彫板者、書者と紀年が見られる。

河西本漢文仏典の印刷の中心地は、賀蘭山の仏祖院であったと考えられている。仏祖院は西夏都城の西北賀蘭山のふもとに建てられた規模の大きい寺院であった。西夏文仏典もおそらく同じ寺院で彫板印行されていたのであろう。

我が国天理図書館所蔵の『高僧伝』巻五（金崇源刊）の尾題のあとに押記した四行の西夏文は重要な事実を提示する。

「夏国賀蘭山仏祖院（𐽀𐽁𐽂𐽃）攝禪円（𐽄𐽅）和尚・李慧月（𐽆𐽇𐽈𐽉）、平尚重照（𐽋𐽍𐽊𐽌）禪師之弟子福恩=報ワンガタメ、十二部大蔵經典及ヒ五十四部華嚴經ヲ印行セリ。復タ金銀字ノ華嚴一部円覚、蓮華、般若、菩薩戒經典、起信論ヲ書キタリ」最後の2字 𐽎𐽏 nafi-rar(平82) 接頭辞+田は意味をなさないが、同じ発音の 𐽐 rar(平82) 書くに替えた当て字であると解釈すると意味は通る。

蓮華の台と蓮華の花の冠を戴いたこの四行の西夏文は、仏祖院の当時の活動をよく物語っている。全く同一の内容の西夏文押記が西安市文物管理処所蔵の『大方広仏華嚴經』巻九の末尾にも発見された。⁵⁷⁾

西夏で北宋銭が流通していたのと同じように当初は宋刻本漢文仏典が西夏の知識人や僧侶の間で需要を満たしていた。

現存する黒水城出土の版本の中には、20種類以上ある漢文仏典はいずれも宋版であり、景宗、毅宗時代の河西版は一点も含まれていない。もっとも古い河西本は恵宗の時代のものである。

故都・興慶府は政治、経済、宗教文化の中心地であると共にそこには仏教寺院も多く建てられていた。上述のように書籍の印行は西夏政府の刻字司によって管理されていたものの、皇室の擁護を受け皇室の法事に必要な大量の仏典は刻字司と関係する寺院で印刷された。漢文・西夏文仏典は主に賀蘭山の仏祖院で彫板印行されたのであろう。私刻本を含めた書籍購入の市場もやはり故都・興慶府にあったのではないかとと思われる。

辺境の地、黒水城（ハラホト）で大量の西夏文献が写本版本含めて発見されたのはそこに寺院の図書室があったためであり、同じ書物が重複して所蔵されていたのもそのためである。例えば『（三才）雑字』や『同音』などの今でいう工具書や『天盛旧改新定律令』のような法律書は数部所蔵されていたものと思える。コズロフ本『天盛律令』はほぼ完本に近いが、スタインも同じ黒水城から別の断片類を持ち帰り、その中には同じ頁が2種類含まれている。⁵⁸⁾

黒水城出土の刊本仏典は大部分が寺刻本であったと考え得るが、西夏語への翻訳者、彫版者、発願者など具体名が記録される文献は少ない数ではない。もちろん紀年のあるものも多い。

以下、代表的な仏典について必要な情報をあげておこう。

1. 金剛般若波羅蜜多經

スタイン本には大型版本の表題が残るほか、まとまった量の刻本残片はないが、大小種々の残片が多数含まれている。それに対して、コズロフ本(TG. 34-)には発願者、紀年を含んだ多量の刻本・写本がある。1999年目録 p. 278-No. 3834 刻本(折本) 白上大国大徳台民渡之衆宮法顕国師 沙門 宝源、梵本ト漢夏注疏等ト重々対校シ雜ヲ刪セシ浄真本ナリ。

姚秦三蔵法師、鳩摩羅什(鞞闍隴羅)

No. 101 刻本(折本) 天盛戊子二十年五月朔一日(1168年)発願シ彫セシムル者 kīε 人樂(菟嶽嶺)彫者 劉菩司(胤薊斃)

No. 5382 刻本(折本) 天盛甲申十六年八月十五日(1164年)印彫発起スル者 前内侍 kīε tshor kañ (菟形殤) 羅鼓邪神瓦(禿滌禪後斃)書

No. 4099 刻本(折本) 大民渡衆宮法顕国師 沙門信畢、宝源(設胤斃) 信畢国師は、ここでは法顕国師 宝源の名前で記されている(p. 18-参照)

2. 仏説阿弥陀經 すべて刻本である。(TG. 106-109) 1999年目録 p. 354-

No. 4773 刻本(卷子本) 惠宗の時代に訳されている。

白上大国大安十一年八月八日(1085年)

記經典訳義証經論法説典思和尚 臆部(菟嶽)

施シ書ッ者 和尚、馬智慧(鞞闍羅)

彫ス者 李実徳劉奴 šir tī liəw n (菟菟斃) 書者、発願者・・・・

No. 6761 刻本(折本) 一帝師、三国師、二法師が名を連ねている。

賢覚帝師沙門、勝(禪嶺)

五明国師沙門 ʔdzañ ʔyañ ʔañ nañ nda (鞞後斃)

金悟国師沙門 法慧

普覚国師沙門 慧護

円融法師沙門 智明

覚行法師沙門 徳慧等 伝

この *ʼdzafī ʼyafī ʼafī nafī nda* とある五明国師は漢字で撈也阿難捺と表記される人物で、次の3の經典にも現れる。西夏の僧の称号に国師、法師、禪師があったことはよく知られている。国師は諸王位と中書位、枢密位の間に置かれ「西夏官階封号表」の中でも、国師の下には‘上品等位’と注される高い地位にあった。『天盛律令』では国師は朝廷諸司中の上品位、即ち中書枢密と対等の位にあると規定している。史金波は24名の国師名をあげている。⁵⁹⁾ 国師の下に法師があり、また禪師があった。ところがここに国師より上の地位にある帝師が出現した。第二の帝師は慧宣帝師、第三は大乗玄密帝師であったことがわかっていいる。サキャ派の道果法は西夏時代に漢文に訳されて『解釈道果語録金剛句記』として残るが、⁶⁰⁾ 次の3行の題款がついており、その中にこの帝師の名が見える。北山大清涼寺沙門慧忠訳 中国大乘玄密帝師伝 西番中国法師禪巴 集 この北山大清涼寺とは賀蘭山中に建立された西夏五台山の一部であった。⁶¹⁾ これに当る西夏文はTG. 251, 913として現存する。

「観弥勒菩薩上生兜率天経」の御製発願文中に記される大渡民寺作大法会の高僧の中にも定律国師、浄成国師と共に大乘玄密国師の名が出てくる。この人がのちに帝師に昇格したのであろう。3人の帝師は同一時期に出現しないのは西夏王朝は唯だ一人の帝師のみを封号したためであらうと史金波は言う。賢覚帝師、慧宣帝師、大乘玄密帝師の順でその地位についた。3名共、西夏国寺院に籍をもった西藏人であった。天盛律令以降に創られた称号であり、元朝はそれを継承したのであって、帝師は元朝の創制ではなかったと史金波は考えている。⁶²⁾

3 . 聖観自在大悲心總持功德経依集 (TG. 369) No. 6881 刻本 (折本) 蔵文 (*ḥphags-pa-spyan-ras-gzigs dbang-phyug thugs-rje chenpoḥi gzungs phan-yon mdor bsdus-pa-zhes-bya-ba* (北京380) よりの訳文。経首欠ける。仏画2折~10折残。経題のあと伝者名と西夏語訳者名がついている。1999年目録 p. 480

西天大 Pandit 五明国師功德司、正受安式 (羈縻)

沙門 *ʼdzafī ʼyafī ʼafī nafī nda* (鞞後殿讖彌) 伝

密顕法師功德司副、受益利沙門 周 慧海、奉詔訳 次の4 . TG. 655 , No. 6821にも同じ文句がついている。⁶³⁾

4 . 頂尊相勝總持功德經依集 (TG. 655) No .6796, 6821刻本 (蝴蝶装) 1999年
目録p. 580-

抄也阿難捺の伝で西夏人・周慧海の訳本である。 6821は頭初が欠けるが、梵語で *uśuniśa vijaya nāma dhāraṇī anuśamsa sahito-sūtrat samgrhitā*、夏語で頂尊相勝總持功德經依集 と並んだ経題があり、明らかに蔵文からの訳であることがわかる。抄也阿難捺の伝で西夏人・周慧海の訳本である、経文の最後に近いところに

𑖀𑖄𑖅𑖆𑖇𑖈𑖉𑖊𑖋𑖌𑖍𑖎𑖏𑖐𑖑𑖒𑖓 (我ヲ大恐怖ノ中ヨリ解脱セシメヨ我ヲ謂ウ) の受益者視点文が使われている。そして尾題のあとに賢造 (御製) とあり、かなり長文の「聖自在大悲心總持并頂尊總持之後序願文」がついている。この一文は黒水城出土漢文の中にもあって興味深い。「……匠ヲ招キ彫印セシメ、夏漢一万五千卷ヲ施ス。国土臣民心ヲ專ニシテ読誦シ、敬信頂受スルベシ」とある。最後に紀年と識語が書かれている。

天盛己巳元年 (1149年) 月 日

奉天顯道 耀武宣文 神謀睿智 制義去邪 惇睦懿恭皇帝 (= 仁宗) 謹施

5 . 三十五仏依懺悔要語 (TG. 103, No. 880) 1999年目録 p. 353. 写本 (卷子本) (チベット文からの訳) 末尾は欠落し、前後完結していない。楷書であるが、ところどころくずれている。覚行法師沙門 徳慧造。この覚行法師沙門 徳慧の名は上掲、仏説阿弥陀経 No. 6761に記された最後の法師として出てくる。

諸仏菩薩一切ニ敬礼

若シ善男子善女子等初無ヨリ起リ 今時ニ到リ五 ヲ断チ罪惱一切ヲ除カント欲スレバ即チ法堂香林静寂ノ宮中ニテ 清メルベシ (蕪w&(上30)) 持国天等ノ語ヲ取ル如ク念声ヲ高クシテ是ノ界ニ記ヲ置キ呪 (辯𑖀𑖄𑖅) ヲ誦エルベシ。

魔害カラ遠ク離レル順

東方ヲ守護スル持国大天王 琵琶ヲ持チ一切魔類ヲ伏シタマウ無量ノ食香一切ニ圍曉サレ汝今是ノ位ヲ東方界ニ記スベシ

各四天王の威力について讃頌と解説がある。

そして呪文を一遍誦えて東方に各々に香水を散布し 白一周すれば則ち東方の魔害は遠のき界を記す也。次いで修求者は南方に赴き・・・・

南方ヲ守護スル増長大天王 手中ニ劍ヲ持テ魔類ヲ一切伏シタマウ

無量ノ篋瓶一切ニ圍繞サレ 汝今是ノ位ヲ南方界ニ記スベシ

西方ヲ守護スル広目大天王 蛇羂索ヲ持テ魔類ヲ一切伏シタマウ

無量ノ龍衆一切ニ圍繞サレ 汝今是ノ位ヲ西方界ニ記スベシ

北方ヲ守護スル多聞大天王 手中ニ幢ヲ持テ魔類ヲ一切伏シタマウ

無量ノ害施一切ニ圍繞サレ 汝今是ノ位ヲ北方界ニ記スベシ

これらの讃頌は明らかにチベット文からの翻訳であり、訳文にチベット語の直訳体がうかがえる。持国天の食香 (= 尋香) は *dri-za* (梵) 乾達婆の直訳、増長天の篋瓶 (= 瓶腹) は *grul-bum* (梵) 鳩槃荼 (海中の人に似た鬼怪夜叉)、広目天王の龍衆 (= 龍王) は、*klu-dbang* の直訳、最後の多聞天王の害施 (= 施碍) は *gnod-sbyin* (梵) 夜叉 (害を与える者) の直訳語である。もとのチベット語形を想定しなければ理解は難しい。別に、

6 . 仏説如来一切皆悉く攝持三十五仏懺悔法事がある。(TG. 513) No. 6386刻本 (折本) 1999年目録p. 529 経首の部分は錯簡して末尾に置かれている。仁宗 (尊号) 賢校とある。紀年なし。敬礼文二種のあと上段蓮台に座った小仏像の下に三十五仏名が並ぶ。

河西本漢文『仏説三十五仏名経』(TK. 26) が現存するが、それには唐三蔵菩提流志奉詔 (訳) とあって、西夏文と比べると仏名は合致するものの (漢文には26仏名が残るのみ)、全体の内容は全く異なる。西夏文は多分、チベット訳文の重訳であろう。

7 . 「九曜供養儀軌」(Cat. 404, No. 872) は巻首の部分が散逸しているが、尾題に九曜供養典一卷終とあるところから、蔵文 (北京3950) *gzal-dgułi mchod-palji cho-ga* (*Navagrahārcana-vidhi*) *T. nags-kyi rin-chen gshon-nu dpal* 林中宝造、一説童子吉祥造 (『蔵漢対照目録』p. 249) の西夏語訳であると判定できる。(写本卷子本)。ただし、No. 872は順序が錯乱している。

この經典中にも持国天、増長天、広目天、多聞天の讃頌があつて九言四句であり大体の内容は上掲6. と似るが、厳密には一致しない。九曜供養典の方は次のようになっている。

持国天 第二句 身体は色白で手中に琵琶を持つ。無量の香食

増長天 第二句 身体は青色で手中に宝剣を持つ。無量の篋瓶

広目天 第二句 身体は赤色で手中に塔を持つ。無量の腐爛

多聞天 第二句 身体は蒼色で手中に幢を持つ。無量の害施⁶⁴⁾

蔵文からの重訳では、作者、蔵訳者と西夏語への訳者名がその地位と共に記されることが多い。例えば連書された、

聖観自在大悲心總持功德經依集 (TG. 369, No. 6881)

頂尊相勝總持功德經依集 (TG. 655, No. 6796)

の2經典には上述のように拶也阿難捺 伝であることと密顕法師功德司副受益利沙門周慧海の夏訳本であることが明記されている。この周慧海の名は訳者としてしばしば記されている。

8. 次の『如来一切之百字要論』(TG. 292, No. 7165) 1999年目録 p. 449

写本冊子装 周 夏訳とあるのも同じ周慧海のことである。

賢覚帝師と西天五明Pandit等 伝

義釈法師ローツァワ(龜綴裂 lu tsan wafi) 師 銀(緡) 梵訳⁶⁵⁾

密顕法師功德司副 周 夏訳

出家功德司正普覚定師 李 漢訳

この「李 漢訳」とあるのは、河西本漢文『念一切如来百字懺悔削門儀軌』に西天金剛座大五明 伝 上師・李法海訳とある人物と同一人ではないだろうか。

9. 『聖勝慧彼岸到功德宝集』(TG. 375, No. 598 刻本(折本)) 1999年目録 p. 483

賢覚帝師經論律説功德司正一院卷依提点(靱綴裂) 受具足(緡羅箭) 沙門羅 勝顯、義測、

西天大Pandit 五明密顕国師、經論律説功德司正受益利沙門・拶也阿難捺、

自実、梵本、持、義証、義釋法師ローツァワ (窳翫翫) 受 tšiqN 吉、沙門・銀阿難 wur (聃履識翫較) tifi (翫) 梵訳、密蹟法師功德司副史受益利沙門 周慧海、夏訳、御前ニテ浄本ヲ書ク者 李三光 (菱翫翫) 書ス

この經典の西夏語訳者も周慧海であった。

10 . 『勝住令順法事』、TG. 391, No. 810 (写本・冊子装) 1999年目録 p. 490

この經典が藏文 *Rab-tu gnas-paḥi cho-ga* (善住儀軌) (北京3960) の西夏訳であることは、次のように著者名及び藏訳者名が一致することから確実に比定できる。

著者 西天五明大師 sumati kirti 造 穠翫翫翫翫翫

御前ローツァワ (窳翫翫) Prajñākīrti 訛翫翫翫翫翫 藏訳

五明出現精舎釈迦比丘 沙門 慧照 夏訳

11 . この沙門慧照の名前もよく出てくる。(糞翫)

『菩提勇識学当道及果与一順蹟积宝燈』(TG. 459, No. 5129) (写本卷子本) 1999年目録 p. 513

西藏中国三乘知悟大秀智宝獅子法造

五明出現衆宮經論律定沙門 慧照 夏訳

經論律定は西夏的表現であろうか。肩書きにやや相違があるが、同一人物であったと考え得る。

12 . ナローパ関係の論はすべて慧照の翻訳であった。

1 . 『念定害止要論』(TG. 606, No. 2892 写本・蝴蝶装) 1999年目録 p. 563

ナローパ道次 沙門慧照 夏訳

2 . 『六法共円道次』(TG. 685) No. 6373 (写本楷書冊子装) 1999年目録 p. 590

?ya liŋ si paḥi (殺翫駱翫) 集、沙門慧照 夏訳

3 . 『六法共円道次』(TG. 684) No. 2734 (写本楷書卷子本) 1999年目録 p. 589

?ya liŋ si paḥi 集、沙門慧照 訳

4 . 『欲楽円融令順要論』(TG. 593) No. 5116 (写本楷書卷子本) 1999年目録 p. 558

大師ナローパ伝、沙門慧照 夏訳

その内容は、次の要論四篇からなる。

- a . 欲楽円融セシム順要論第一
- b . 拙火ト大楽ト円融セシム順要論第二
- c . 夢境ト幻夢ヘ円融セシム順要論第三
- d . 睡眠ト光明ト円融セシム要論第四

5 . TG. 594, No. 2546 (写本楷書蝴蝶装) ナローバ師道次、沙門慧照 夏訳
光定癸未年九月朔九日(1223年?)の紀年有り。1999年目録 p. 559

6 . TG. 593 , No . 7164 『欲楽円融令順要論』(冊子装楷書写本小型本)上掲No.
5116にあたる一部が残る。⁶⁶⁾

13 . 『菩提勇識之業中入順』(TG. 400) No. 4827 (写本卷子本)にも、五明出現衆
宮沙門 慧照とある。照の字は𑖇と書かれているが、𑖇が正しい。この經典
は藏文 *Byang-chub-sems-dpañi spyod-la ljug-pa* 入菩薩行からの訳であろう
(北京5272)。そして、同じくTG. 118に入るNo. 944 (刊本卷子本)に記載される
作者名は藏文に記載される著者名と合致する。1999年目録 p. 493-

西夏文著者名 藏𑖇𑖇𑖇𑖇 *sia tañ ndeñ wañ* 造

藏文に記される著者名 Śāntideva

西夏語訳者として、訳伝義測主経論律説国師沙門德源(奉)詔 訳すとある。
德源については後で考えたいが、慧照の名前は『聖金剛王能断勝慧彼岸到大乘
経』(TG. 380)にも出てくる。これも藏文よりの翻訳であろう(北京739)。

TG. 380 , No. 2561 (写本、蝴蝶装)には
法師 *su tien* (𑖇𑖇) 上尊 集 沙門慧明 夏訳
となっている。

14. 『医薬光之供順』(Cat. 241, No . 2543)(外題『医薬光海生金剛王文二類』)梵
語 : *Amṛta prabha-sadhana*のあとに連書されている『吉祥呼金剛求順』梵
語 : *Śrī-Hevajra nāma sadhana*には、西天海生師 造とあり、末尾の識語には、
西天大Pandit prajñāprimaの御前にて比丘宝賢 藏訳、功德司正副使(𑖇𑖇)
三学院提点 沙門慧照、李 夏訳と書かれている。この經典は藏文(北京4115)
Dgyes-pañi rdo-rjeñi grub-thabs (喜金剛成就法)の訳ではないかと考えるが、

蔵訳者名が合致しない。(蔵文にはTshul khriims rgyal-mtshan訳とある。)また、15.『六法自体要論』(TG. 605) No. 2542(写本冊子装)には、「ナローバ道次、沙門慧明(糞糞)夏訳」とあり、『心習順次』(TG. 422) No. 5923(写本卷子本前部欠)にも、「三乘知悟 siufi mba(糞糞)上師の御前にて比丘慧明、夏(語)に訳す 浄本書者 僧戒慧(糞糞)」とある。前者は慧照の書き誤りであるのかもしれない。後者は別の人物であったと考え得る。

16.『等持集品』は蔵文 *Ting-nge ldzin-gyi tshogs-kyi lehu zhes-bya-bā* 『三味糧品』(北京5319)の西夏訳本と比定できる。(TG. 409) No. 816写本・小型冊子装と(TG. 410) No. 2852刻本・蝴蝶装がある。ほぼ同一の内容の写本と刊本である。写本は首尾完全で、刻本の方は巻尾の2頁が欠ける。巻首に覺賢菩薩集とある。これは蔵文の byang-chub bzang-po (Bodhibhadra) と合致する。No. 816には4行の識語があるが、No. 2852についている3行の識語と全く同一の内容である。刻本・冊子装(No. 2852)にはそのあとに 糞糞(論思)があるが、その前に次のような識語が書かれている。

「是ノ等持集品ハ西天大師 Vinayacandraト通事(糞糞)蔵比丘、法慧(糞糞)等ガ訳セリ。のち夏国永平皇帝(仁宗)ノ世ニthao si xafi(糞糞)が正法隆盛(ノタメ)衆宮中ニテ經典ヲ訳シ、義測法門事知渡脱三蔵功德司正国師鶴善(糞糞)嵬名徳源 夏本ニ訳ス」

ここにも先にあげた徳源の名前が出てくる。嵬名のつく皇室関係者であった。蔵文への2人の訳者名 糞糞糞糞刻糞 Vinayacandra と法慧は、蔵文の記載にある Vinayacandra と Chos-kyi shes-rab とうまく合致する。

B 活字本(泥活字と木活字)

西夏文經典の中に活字本がある議論は京都で始まった。京都大学所蔵の大方広仏華嚴經刊本についてである。その経緯については藤枝晃が「西夏経 石と木と泥」1958年『石浜純太郎古稀記念東洋学論集』に書いている。筆者は『西夏語の研究』『西夏文華嚴經』の中でこの問題にふれて来た。その後史金波は木活字問題を積極的に取上げ数篇の論文と一冊の専著にまとめた。⁶⁷⁾ それらの研究は高く評価したい。ただ筆者が以前に提出した重要な問題にも注意して

いただきたい。華嚴經について考察したように刻本（若しくは手抄本）から活字本を新たに組版する際に經典本文を改変した可能性がある点である。たとえば「衆生」は手抄本の 羴羴 有情も 羴羴 群生も共に活字 羴羴 有生で組み、 羴羴 心喜は活字本で 羴羴 歡喜に改めた。つまり単に印刷技術の進展だけではなく、それに伴ってその機会にある程度の用語の統一も行っていたのではないだろうか。筆者が永年気にしているもう一つの問題も付言しておきたい。京都大学所蔵の華嚴經が木活字本であることは確かな事実として認められている。しかしそれが作成された年代についてはなお未解決であると言える。河西時代にまで遡らせる研究者もいるが、筆者の感覚ではそうでないように思える。筆者はもとより紙について専門知識をもたないが、これまでに河西本と認められるコズロフ収集本やスタイン収集の西夏經典の実物を多量に見て手にふれて来た。その感触の中には京大本のような薄手の紙には一度も出会わなかった。科学的に根拠は全くないけれども、もう少し年代が新しい少なくとも西夏国滅亡以降のものに思えてならない。クチャーノフはコズロフ収集本の紙質の科学判定を行っているが、華嚴經についても是非判定をお願いしたい。[追記参照]

目下、『大方広仏華嚴經』のほか『維摩詰所説經』（泥活字？）『大乘百法明鏡集』『地藏菩薩本願經』『三代相照言文集』（三世属明言集文）と上述した『徳行集』（甲種本）が活字本とされている。

付記 なお世界各地で少数の西夏語仏典が保管されていると思う。その状況を十分に把握できていないためここでは多量の文献の所蔵機関を中心に述べるにとどめた。日本でも某処に数点の仏典が所蔵されており、筆者は以前調査したことがあるが、今はその時の記録が見付からないためふれていない。法華經が数点あったと記憶する。

-) この拙論は数年前に執筆した原稿に加筆し注を加えたものである。近年の研究結果をできるだけ補足したが、なお十分に言及していないところがある。他日補いたい。

注

- 1) 『宋史・夏国伝』に「元昊自制蕃書、教国人以紀事之文用蕃書」とある。西夏文字は当時西夏第一の文士野利仁栄を中心に西夏の学者と漢人群が共同で考案したものと考えるべきであろう。中島敏「西夏に於ける政局の推移と文化」『東方学報』東京第六冊1936年。
- 2) 元昊が設けた番大学院と漢大学院は政府の機関であって、野利仁栄が主持した「蕃学」やのち崇宗が設けた「国学」(1101年)、仁宗の建てた「漢太学」(1145年)と混同してはならないと聶鴻音は強調する。後者は3つとも学校であって政府の機関ではない。いずれも皇帝の儒学崇尚の志から造られた学校である。聶鴻音「“蕃漢二字院” 辯正」『寧夏社会科学』1998年、2期。仁宗はまた人材を集め漢文化の吸収と推進を目指して、中原に模して科举の制度を設けている。
- 3) 禪都六年(1062年)毅宗は宋に馬五十頭を献じて、宋太宗御制詩草、隸書石本を求め、また書閣宝蔵の建設を思い立ち九經、唐書、冊府元龜を求めた。宋の仁宗は西夏に九經「易、詩、書、礼、春秋、孝經、論語、孟子、周礼」を与えた。現在のところ孝經、論語、孟子の西夏語訳は知られているが九經全部を翻訳したか否かは不明である。
- 4) 行書・草書の貸借文書(契)は後述のコズロフ及びスタイン収集品の中に数多く含まれるが、現在大部分が未解読である。
- 5) チベット大蔵経はずっと手書き写本の形で伝えられたが、14世紀明代永楽帝の時代になって初めてカンジュールが木版印刷された(永楽版)。その後チベット本土で18世紀にナルタン版が造られ、相継いでデルゲ寺、チョーネ寺で木版大蔵経が開板された。清朝になって北京版が出来た。また19世紀にはラサ版も造られている。現在それらの各版が世界中に広く流布している。更に永楽版よりも古い麗江版の存在も知られている。

このような状況の中で、黒水城出土本の中にチベット蔵経が含まれている事実(河西版)は、チベット文の印刷が12世紀までに遡ることになり、しかもその中に蝴蝶装の体裁をとるものが含まれていることは全く驚きである。史金波は昨年発表した「最早の藏文木刻本考略」の中でそれを紹介しているが(『中国蔵学』2005年4期) 実は1993年にロシアが黒水城文化の展示会のために作った冊子の中で見本の写真とその内容を公開している。(The State Hermitage Museum, *Lost Empire of the Silk Road, Buddhist Art from Khara Khoto, (X-XIIIth Century)* edited by Mikhail Piotrovsky, Thyssen-Bornemisza Foundation, Electa, Milano, p. 87 Buddhist Text Late 12th Century ‘Butterfly’ book Xylograph XT-67独文版と中文版もある) 版心を中心に(見本の写真には版心はない)左右両葉があるが左から右に行が進み、版心のところで下の行に移らず版心を越えて右葉に続いて行く。つまり一葉の左右両面にわたって一行を通読する形をとっている。勿論西夏文にはこの体裁は有り得ない。蝴蝶装の新しい形である。史金波によるとXT-67のほか、63と68号も同じであるらしい(筆者は実物は未見)。他方、筆者は西夏文の中に西藏経貝葉本(梵貝装)に近い形があることを強調しておきたい。天理図書館蔵の『摩利天母總持』がそれであったが、

- 1996年にコズロフ収集本の中にもっとチベット経に近い体裁をもつ西夏経に出会った(西田『西夏王国の言語と文化』岩波書店1997年、p. 434 付記5を見られたい)。経文印刷の体裁の上で西夏と西藏が相互に影響し合っている点は興味深い。
- 6) 拙文「西夏語訳法華経について」『西夏文妙法蓮華経』創価学会刊2005年を見られたい。ドイツ国家図書館所蔵本は目下行方不明らしい。
- 7) ペリオ自身がそのように述べている。cf. Pelliot *TP* 1926年
- 8) 拙文「西夏語研究と法華経(Ⅰ)」『東洋学術研究』44巻1号 注4)
- 9) 石浜純太郎「西夏遺文雑録」(1925年)、ネフスキー『西夏文字抄覧』の序、大阪東洋学会亜細亜研究四号1926年刊。
- 10) その目録は1963年に 編、
『西夏文の写本と刊本』が出ている。筆者はその中、主な仏典314点について「西夏仏典目録」『西夏文華嚴経』(京都大学文学部1979年)の中で同定を試みた。その後総括的な仏典目録が刊行された。 編、
西田序論。京都大学文学部言語学研究室刊1999年。以下、文献 Cat...は1963年目録に、TG...は1999年目録によっている。
- 11) 寧夏大学西夏学研究中心、国家図書館、甘肅五涼古籍整理研究中心編『中国蔵西夏文献(1)』(史金波解説)甘肅人民出版社、敦煌文芸出版社刊2005年を見られたい。1930年頃に作成された周叔迦の目録には大般若経は入っていない。(『西夏文専号』『輔仁学誌]) なお同じ北京図書館蔵西夏語文献は『中国国家図書館蔵西夏文献』という書名で上海古籍出版社からも刊行されているが(2005年既刊2冊)、その方には、この古い蔵書印は複写されていない。
- 12) その第一冊については拙評『東洋学報』87巻3号2005年がある。
- 13) 『文物』1987年7期にその報告がある。なお拙文「黒城と西夏語文献」拙著1997年、所収p. 383- 参照。
- 14) その写真の鑑定を依頼されたが、その中に「聖勝慧彼岸到功德集頌」の断片5折分が含まれていることがすぐにわかったので中西氏に知らせたが、5折分の中2折分の実物が同氏の手に移ったらしい。氏の没後国立民族学博物館に移り今はそこで保管されている。珍しい刊本ではない。ほかに『同音』の小断片もあった。
cf. 荒川慎太郎「国立民族学博物館所蔵 中西コレクションの西夏文 『聖勝慧彼岸到功德宝集頌』断片について」『内陸アジア言語の研究』 2003年。
荒川は「.....来歴を含め、いかなる経緯でこのような裏打ちが行われたのか定かではない」と書いている。
- 15) この管主八の願文については上掲拙著1997年、p. 422-を見られたい。
- 16) 石浜純太郎「西夏遺文雑録」上掲注9) 参照。
- 17) 1970年当時の筆者の調査記録が行方不明になっているため、ここで詳細を述べる
ことができない。
- 18) 松沢博「ペリオ将来[敦煌]西夏文書初稿」リスト 1988年8月30日作成 未公開。
- 19) 常書鴻の自伝『敦煌の守護神』NHK出版2005年によると、張大千は1941年と42
年に個人の資格で2度敦煌に来て、1943年に莫高窟を離れたとある。

- 20) 拙文「天理図書館所蔵西夏語文書について」・『ピブリア』9・10、1957年・1958年 なお拙著1997年、参照。
- 21) 拙文「天理図書館蔵西夏文無量寿宗要經について」『ピブリア』(富永先生華甲記念古版書誌論叢)23号1962年。
- 22) 史金波の報告論文には 敦煌莫高窟北区西夏文献譯釈研究(一)『敦煌莫高窟北区石窟』第一巻、彭金章・王建軍、敦煌研究院編 所収pp. 358-370文物出版社2000年、「敦煌莫高窟北区出土西夏文文献初探」『敦煌研究』2000年、3期があるが、の方が詳しい。以下その報告によっている。ほかに 彭金章「敦煌莫高窟北区石窟新発現的文献及其學術價值」『新世紀敦煌学論集』巴蜀書社2003年 p. 66でも出土品は紹介されている。
- 23) このBは北区石窟を指している。B53とは北区53窟の意味である。
- 24) 張思温「活字版西夏文『華嚴經』卷十一至卷十五簡介」『文物』1979年10期注 及び上掲注(11)『中国蔵西夏文献(1)』の史金波の序による。
- 25) 2005年に刊行された『中国国家図書館蔵西夏文献』(全5冊企画の中の2冊既刊 上海古籍出版社)の解説の中で李範文は日本の天理図書館所蔵の断片が靈武県出土のものではないかと書いている。あとで述べるように天理図書館蔵の断片は2つの経路で納まっている。一つは張大千の旧蔵本であり、先に書いたようにこれは敦煌北区石窟から出たものであることはほぼ確かである。もう一つは清野謙次旧蔵本で、北京で入手したものである。この断片集には黒城文書と題記されている。靈武県出土品を含んでいる可能性は皆無ではないけれども、筆者はそうではないと考える。因に木活本は一点も含まれていない。
- 26) 上掲注24)にあげた『文物』1979年10期を参照されたい。
- 27) 1)天梯山石窟発見2)張義西下西沟峴発見「甘肅武威発現一批西夏遺物」甘肅省博物館『文物』1978年8期、『考古』1974年3期・6期、拙書1997年、p. 468、拙文「西夏語研究と法華經()」『東洋学術研究』2005年 注9) p. 210参照。
- 28) 拙著『西夏文華嚴經』 「あとがき 西夏訳経雜記」を参照されたい。
- 29) 拙著1997年。〔付記〕(3) p. 436に詳しい。
- 30) 『拜寺沟西夏方塔』寧夏文物考古研究所編著 北京文物出版社2005年刊。『文物』1994年、9期所載の牛達生の報告(上掲、注29))以降、聶鴻音「賀蘭山拜寺沟方塔所出“吉祥遍至 和本統”的譯伝者」『寧夏社会科学』2004年 期が出ている。筆者はこのテキストの通読はまだ完了していないが、梵語との対応が問題になると考えている。たとえば 𐽀𐽁𐽂𐽃 nafṅgafīrar=skr nakhara 爪、𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄 sarīrapah=skr śrava 耳、𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄𐽅 rar...na=skr rasana 舌など。私見は検討していずれ発表したい。
- 31) 賀蘭山麓の西夏靈園からは数基の碑文が破壊された状態で数多く出土したが、紙の經典文書類は出ていない。『西夏陵墓出土残碑粹編』文物出版社1984年。なお西夏語碑文には、涼州感応塔碑(1094年) 賀蘭山陵墓碑(数基) 居庸関内壁六体刻文東壁・西壁(1345年)と。明代保定韓庄石幢(2基、1502年)がある。
- 32) 西夏の天盛時代の法律書『天盛旧改新定律令』は史金波等の中文訳が出来て便利であるが(史金波・聶鴻音・白濱訳注『中華伝世法典天盛旧改新定法典』法律出

- 版社、2000年）引用に当たって注意が必要である。cf. 拙文「黒水城出土西夏文献について」『日本学士院紀要』60巻1号2005年。
- 33) 拙論「西夏語『月々楽詩の研究』」『京都大学文学部研究紀要』25号、1986年。修正補足した論は拙著1997年に入っている。p. 162。
- 34) 各本は奥書きが少しずつ異っている。拙著1997年、p. 130-。
- 35) 拙論「西夏語韻図『五音切韻』の研究」(上)『京都大学文学部研究紀要』20号1981年、p. 110-に試訳をあげたが、ここに改訳を示しておきたい。なお旧版『同音』の訳は拙著『西夏語の研究』1、1964年p. 16-に掲載したが、訂正する必要がある。また李範文『同音研究』(寧夏人民出版社1986年)に旧版の訳文があげられている。参照されたい。
- 36) いまのところ傍証はないが、𐽀𐽁『手鏡』または『手鑿』とよぶ韻書がほかにあったと考えておく。
- 37) スタイン収集品中に『同音』の残片は大小さまざまの形で含まれるが、いずれも新版の断片である。上掲注12)の拙評を見られたい。
- 38) 拙著『西夏語研究新論』西田先生古稀記念会編1998年、京都大学文学部言語学研究室刊、p. 81。新版『同音』と「韻書残巻」(同書p. 25)を比べると字数に多少の異同がある。たとえば牙音類独字28A5に一字、牙音類独字28B1に部姓字5字、28B2に1字というように晩年に造られた韻書残巻にはかなり新しい字形が増えている。しかし西夏文字の総字数についての議論はここでは避けておきたい。
- 39) 拙著『西夏文華嚴經』、1976年、p. 12注22)。
- 40) 拙著1997年、p. 125-。
- 41) 筆者は以前からこのテキストに注目し、司馬温公『資治通鑑』の抄訳ではないかと考えていた。徳行集=徳業集は複雑な文法表現はあまり使わず、音節調整と漢語に合わせて多くの詞を造っており、詞の意味が判明すれば正しく理解できる。字義から詞義への転換を他の資料と共に検討する上で有用なテキストである。その問題は別に論じたい。cf拙著、1997年、p. 375-。
- 42) 甲本の最後の印版発起人3名の名前を聶鴻音は、学士訛里信明、学士味奴文保、節親文高と読んでいる。信明は信照であると考えが、他の2名は字が不鮮明で判定がむづかしい。次のように表音しておく(漢字の比定は待考)
𐽀𐽁 η^wun (平31) 𐽀𐽁 son (平54) 𐽀𐽁 $𐽀𐽁$ $paŋ$ (上17) 𐽀𐽁 $nduŋ$ (上14) 文² $wiŋ$ (上67)
 なお節親とは西夏皇族嵬名の一族であることを指している。
 また西夏国の印刷に関して『西夏書籍業』(俄)捷連提耶夫-卡坦斯基著 王克孝 景永時訳 寧夏人民出版社 2000年が刊行されていて有用である。
- 43) 孫子と並んで兵法書『六韜』、『黄石公三略』も西夏語に訳されていた。筆者の手許にはその訳文研究は大体出来ているが、六韜の西夏語訳には漢文現行本と相違して虎韜篇に一戦 𐽀𐽁 $𐽀𐽁$ 和 𐽀𐽁 $𐽀𐽁$ 攻城(城を攻める)という章が加っている。一昨年中国社会科学院所属の若い研究生宋璐璐氏はそれに関する研究を発表した。(「西夏訳本中的兩篇“六韜”佚文」『寧夏社会科学』2004年、1期)その主旨を紹介しておく。『六韜』古本の概貌を知るのは難しいが、敦煌出土の唐代写本残巻や山東銀雀山と河北定県から出た西漢の竹簡によって古本六韜に対する認識が

変ってきた。西夏語が依拠した底本は宋代の武経七書以前のものであったに違はなく、内容は今本よりも多かった。西夏語本の解読は『六韜』の伝播史研究の一端を補う新しい資料となるであろう。たとえば『太平御覧』巻一三兵部決戦下など唐宋典籍にその引用があることを指摘している。

極く最近届いた『民族研究』2005年、6期にも鍾焯「黃石公三略西夏語本文の文献特征」が掲載されていた。

「漢文底本は当時官定の武経七書ではなく、宋以前の古本でもない。武経七書と古本を均しく関連するものであったが、古本と契合する度合の方がずっと高い、西夏語文は古本から武経七書が代表する今本への流れの過程にあった」と要約している。

このような研究は、誠に結構で歓迎すべきであるが、筆者は西夏語研究の立場から率直に言って次のような考えをもっている。西夏語訳文は漢文底本の原文字句を逐字逐語的に翻訳したものではなかった。上述した『論語』の四悪のように西夏人独自の解釈から多くの改変を含んでいた。事実原文の忠実な置換えだけではよく理解し難かったため、原文の字句に拘らず西夏人の咀嚼を通して表現したものであった。このような見方の当否は一つの研究課題となるであろう。

西夏人が行った翻訳という仕事は、仏典にしても古典にしてもつねに西夏語という文章語の推敲にかかわって来たと思う。新しい語彙の創作、字義の新しい搭配から新たな詞義を生み出し新しい語法の創造を中心とした仕事であった。特定の漢文テキストを定本とした作業であったに違いなかったが、西夏文から当時の原文を正確に復原するのは困難なのではないだろうか。勿論『六韜』のように『武経七書』にない章が含まれる場合には別の古本によったに違いないから、その内容を知る上で西夏文が大きい手掛りとなるに相違はないけれども。

44) クチャーノフは“

、1974年”を刊行して原文写真とロシア語訳を発表した。のち陳炳應の『西夏諺語』山西人民出版社も出ている。その内容のサンプルは筆者の『アジアの未解読文字』（大修館書店1982年のち『アジア古代文字の解読』（中公文庫）B7 20）を見られたい。また松沢博氏は書誌学的な考察を発表した。（「西夏文『新集錦合道理』について」『小野勝年博士頌寿記念東方学論集』1982年）松沢氏は後記の最終行を「? 商phu-lu まさに彫印を願うべし」と訳し、下線の部分をクチャーノフにしたがって「荒毛商」ととると述べている。クチャーノフは褐商と訳している（?）。陳炳應は「褐（布）商蒲梁尼尋印」と訳す。原文の一行は字形がくずれていて判読が困難である。松沢氏は更に『聖大乘大千国守護経』の最後につく後部2行を取り上げ対照している。（グリinsted『西夏大蔵経』巻9、p. 2119）新刻発願者 新城面前南壁〔材〕木商pa・ań張〔某〕まさに〔彫印〕を賜わる也 刻字者?fīe-su-kōń也

この2つの後記の対照は大きい意味がある。次に西夏文を対比すると、

A 𐰇𐰏𐰔𐰕𐰖𐰗𐰘𐰙𐰚𐰛𐰜𐰝𐰞𐰟𐰠𐰡𐰢𐰣𐰤𐰥𐰦𐰧𐰨𐰩𐰪𐰫𐰬𐰭𐰮𐰯𐰰𐰱𐰲𐰳𐰴𐰵𐰶𐰷𐰸𐰹𐰺𐰻𐰼𐰽𐰾𐰿 (新集錦合道理)

now 商 phu 蒲梁 niń 印求

B 𐰇𐰏𐰔𐰕𐰖𐰗𐰘𐰙𐰚𐰛𐰜𐰝𐰞𐰟𐰠𐰡𐰢𐰣𐰤𐰥𐰦𐰧𐰨𐰩𐰪𐰫𐰬𐰭𐰮𐰯𐰰𐰱𐰲𐰳𐰴𐰵𐰶𐰷𐰸𐰹𐰺𐰻𐰼𐰽𐰾𐰿 (聖大乘大千国土守護経)

木(?)商phañに張niñ印求

AとBは並べてみてn₀w 商phuとsiñ 商(これは木の字ではないと考える?) phañ は荒毛商や材木商とは思えず、書肆の屋号であったのではないか。(一屋、一店)そこに(漣? añ 於格助辞)梁氏(A)張氏(B)が(菟)印行を求めた(依頼した)と考えるのも一つの読み方であろう。𪛗 bzi²(平90)は法華經に𪛗𪛗「賜る」の使用例があるが、ここでは求める・依頼するの意味にとりたい。Aの梁氏、Bの張氏が発願者であって、菟がそれを表していると考え後考をまちたい。

Aは刻字士の名を記録していない。欠落した(?)がBには2行目に𪛗𪛗𪛗 tšew(平84) s^weh(平36) suñ(平27) k⁰ñ(平49)の四字名があがっている。

45)以下黒水城出土漢文仏典についてはメンシコフの研究解説に負うところが大きい。

() ,1984年 中文訳[俄]孟列夫著 王克孝訳『黒城出土漢文遺書叙録』寧夏人民出版社 銀川1994年。以下メンシコフの分類はM...で示す。

46)西夏文大般若は上述のように現在は北京国家図書館に保管されている。またスタイン収集品の中にも残巻が多く含まれているが、まだ西夏語研究の対象になっていない。単純文で視点文はなく初期の訳文を思わせる。

2002年に聶鴻音の『西夏文德行集研究』が刊行された。筆者の言う丙本は取上げられていない。丙本の始めに「徳業集」と明記されているが、実際は馬の話で最後に「馬の相の善悪を観察する順 終 乙未年 月十五日」とある。その後半は『大唐三蔵西天』(拙著1997年、p. 357-)と内容が重なるところがある。

47)この西夏文は格助詞は使われているが、動詞の接頭辞はA B共に現われず視点文もない。筆者の言う単純文体であるが、用語は複雑なためかなり難解な文章となっている。

48)この置換えには問題がある。鮮卑とする人、信壁と読む人もいるが、筆者は信畢としておく。(待考)

49) 120木刻本(蝴蝶装)であって二十七葉から四十三葉(右)まで残る。版心略題は賢智とあり、丁数は西夏字ときに漢字で黒抜白字である。2538と同じ版木であったと思われる。

50)本稿を書いたのち2003年に聶鴻音氏の「西夏文“賢智集序”考釈」『固原師專学报』24巻5期(pp. 46-48)が発表された。筆者の読みと相違する三点を示しておきたい。筆者は𪛗𪛗𪛗を逐字的に皇城遠見司としたが(この役職はほかに見えない)、聶氏は皇城司と同じと考えて皇城検視司とする。筆者は神嵬徳進とするが、聶氏は成嵬徳進をあてる。これはšio(平17)に対する漢字の使い方大きい問題ではない。(因に陳炳應は叔嵬を当てる『西夏文物研究』1985年、p. 258) 𪛗を聶氏は撰と訳する。実際は撰述であるかも知れないが、筆者は(弁)才と見たい。内容は宝源が法堂で語ったものであると考えられる。𪛗𪛗(上42)を吟と考えると𪛗𪛗(上42)銀と同じ対音になる。

51)この二字を驚奇と訳しておく。

- 52) 「金碎掌置文」と「夏聖根讚歌」についてはそれぞれ拙著1997年、p. 352およびp. 131-を参照されたい。
- 53) 実はその西夏文經典名は決定できていないが鮮明な刻本で(8行残下部欠)同じ内容が2枚あって、その一枚の方の行間に某言語が書込まれている。上掲注14)参照。
- 54) メンシコフ上掲1984年、p. 208中文訳p. 141。
- 55) 西夏の訳經事業については史金波「西夏譯經図解」ほか文集所収の諸論考を参照されたい。『史金波文集』上海辞書出版社、2005年及び『西夏仏教史略』寧夏人民出版社、1988年、拙著1997年 四章「西夏王国と仏教」付記など参照。
- 56) 河西で印行された漢文『仏説聖仏母般若波羅蜜多心經』(TK. 128, M182)は西夏文より2年遅れて発刊されたが(天盛十九年丁亥五月(1167年))、同じく御製発願文がついている。
「因此朕(仁宗)命沙門德慧逐字从梵文重譯此經 紀念太后皇妣(即曹氏)開版印造此經、番漢共兩万卷。德慧等僧應作法華會、誦誦金剛般若經、般若心經、救生濟貧、資往仏土、祝願六廟祖宗恒遊極樂、万年社稷、永享昇平」この願文から西夏の仁宗が皇太后(曹氏)の三周忌のためこの經典の西夏文と漢文共に2万巻を印行したこと、德慧はじめ高僧に法会を設け金剛經などと共に誦誦一族の安寧と國家の平安を祈ったことがわかる。更に重要なことは西夏經は漢文、西藏文よりの訳文のみと考えていたこれまでの知識を破って梵文から直接に訳したのもあった事実が判明したことである。西夏文 6796の末尾にもよく似た発願文が付いているが梵文から訳したことは記録していない(拙文「西夏語仏典目録編纂上の諸問題」1999年、p. 、クチャーノフ「西夏文仏典目録序」を参照)、史金波1988年p. 259、メンシコフp. 229- 中文訳p. 157。
また漢文『仏説聖大乘三帰依經』(TK-121, M179)も蘭山智昭国師沙門德慧奉詔訳とあり、乾祐十五年甲辰九月十五日の紀年があるが、これにも西夏文の一部が残っている。共に西夏文から漢文に訳されたものであろう(拙文上掲1999年、p. 、メンシコフp. 226- 中文訳p. 154-参照)
- 57) 史金波・白浜「西安市文管處藏西夏文物考」『文物』1982年4期。
- 58) 拙文「黒水城出土西夏文献について」『日本学士院紀要』第六十卷一号2005年、p. 15。
- 59) 「仏教制度新探」『寧夏社会科学』2001年5期。
- 60) 拙文1999年p. XLVIIに「道果金剛言集三解具記」をあげた。言集は語録と改めるべきであり、三は之の誤印である。若干の經典は西夏国内で同じ藏文から西夏文とし漢文に訳されていたらしい。
- 61) この漢訳仏典は陳慶英が紹介した。「“大乘要道密集”与西夏王朝的藏伝仏教」『中国蔵学』2003年3期、優れた論文である。ほぼ同じ内容が王堯主編『賢者新宴3』河北教育出版社2003年(石家庄市)に掲載されている。
- 62) この史金波の意見に筆者は賛同したいが、反論も出ている。張羽新「帝師考源」『中国蔵学』2004年1期。
- 63) 『観自在大悲心陀羅尼功德經』の断片は甘肅省武威県天梯山石窟からも出土して

いる。(『考古与文物』、1983年1期)松沢博氏はその写真から比定し藏文からの訳であると述べている。「西夏仁宗の譯經について 甘肅省天梯山石窟出土西夏經を中心として」『東洋史苑』26・27合併号1986年。

- 64) ほかに「四天王護摩壇本」(Cat. 214, 820)にも四天王に対して護摩供養する際の頌言呪文が述べられている。拙論「西夏語研究の新領域」『東方学』百四輯2002年参照。
- 65) チベット語 lo tsha-ba (通事)は、西夏語でA 𐽀𐽁𐽂𐽃 lu tsafi wafi またはB 𐽀𐽁𐽂𐽃 tu tsan wafi で音写される。Aは漢語略拶瓦にあたり、Bは路贊訛に該当する。後者の音写は、おそらく西夏語形を介して現れたのであろう。また寺院は西夏語で「衆宮」と表現され、𐽀𐽁𐽂𐽃と𐽀𐽁𐽂𐽃の二様に書かれる。2番目の文字は共に miŋと読んで𐽀𐽁平声14韻と𐽀𐽁上声12韻の違いを示している。
- 66) 草書体で記されたナローバの著作リストがあった「六法第三 共円道次 四時默有 双入要論 道修時自攝持次 円融与識逝順要論 ナローバ意於持当光明要論 識逝十二種要論 四種光明 最中(最も)貴当十八種法」なおこれらの西夏文はすべて現存する。(右掲図版参照)
- 67) 史金波「西夏活字版文献及其特点 世界上現存最早的活字印本探考」台湾『歴史文物』七巻3期1997年、pp. 22-39。

「現存世界上最早的活字印刷品 西夏活字印本考」『北京図書館館刊』1997年1期。

史金波・雅森・吾守尔『中国活字印刷術的發明和早期傳播』社会科学文献出版社2000年。

宋朝畢昇の泥活字、元朝王禎の木活字については、庄威『中国圖書の歴史』吉村善太郎訳(臨川書店1989年)、張秀民・韓琦『中国活字印刷史』(中国書籍出版1998年)参照。後者は、西夏活字の一節を設け、京都大学所蔵『華嚴經』巻五末の題記を引くが(p. 23)、それを天理図書館と誤っている。この誤りは他でも見かけるが、その元は『西夏文物』(史金波・白濱・呉峰雲編著、文物出版社(1988年))の図版398の解説にあるらしい(p. 333)。なお李致忠『古代版印通論』(紫禁城出版社2000年)も第七章西夏の版印概説を設け西夏の印本を概説している。

追記

本年(2006年)3月に書店から筆者の手許に林世田主編『国家図書館蔵西夏文献中漢文献積録』(北京図書館出版社2005年12月刊)が届いた。この書は、靈武県出土の西夏文献のカバーなど装訂に使われた漢文典籍(仏教文献と道教文献)の研究であって、宋刻本が5点あるほかはすべて明代の刊本・写本であるという結果を出している。この結果は凶らずも筆者が当初考えた明朝初期の刊行であるという仮説を支持する状況をもたらした。その書には付録として白濱の「寧夏靈武出土西夏文文献探考」(pp. 115-131)がついている。その中で白濱が述べているように、この事実は西夏文献の刊行年代を確定する上で一歩進んだ左証を提供するが、同時にそれらの漢文典籍が明代に西夏文献を補修した折りに入ったものか、それとも明代に西夏文仏典を印行したときに使われたものか、その両方ともあり得るのかという問題を提出した。先入観を捨ててこの問題を検討するべきであろう。因に史金波は多くの人は宋代畢昇が活字印刷を発明してのちしばらくしてからやはり元代に創られたものと考えているが、或は西夏時代のものかもしれないとしながら、自身は最後に作者案として木活字本『華嚴經』は元代の印本であると結んでいる(「現存世界上最早的活字印刷品」上述『文集』p. 396による)。なお、白濱の論文は、同じ論題で『寧夏社会科学』2006年1期にも掲載されている。

白濱のこの論文は、靈武出土文献に関して当時の記録を丹念にあたり詳しく調査した優れた論述であり、出土年代は民国6年(1917年)が正しいとするものの、出土地点が i 城牆なのか、ii 近郊の蕃寺或は仏寺遺跡なのか決定できないし、出土した西夏文献の分量・種類と散佚した状況も不詳であって未解決の問題が多くあると述べている。大部分の文献は1922年に北京図書館に入ったが、(周叔迦は、1930年冬に収ったと書いている『輔仁学誌』)それ以前1922年までは『西夏文華嚴經』巻一から巻十までの10巻は杭県邵氏の収蔵であり、巻十六から巻二十までと巻二十一と残一頁半は上虞羅振玉が所蔵していたという。

羅福萇の『西夏国書略説』(初版は1914年)の末尾にある付録北京図書館蔵河西字蔵經略目には、十、大方広仏華嚴經 八十巻本残2部 甲種自巻十一至巻八十中間缺三十四冊、・・・乙種 竹紙・・・とあり、当時すでに北京図書館に収まっていることを示し、同書の研究書并参考書目の中に、三 西夏文專号

(1932年)、四 西夏研究 王静如三冊(1932-33年)が入っているから、至少1933年以降の情報と見なければならぬ。『西夏国書略説』には数種の版があって、いま筆者の手許にある写真複製本は何に基づいたのか失念したが(京都大学文学部蔵本ではない。)その表題は西夏文字で『夏国文字略説一卷 福成』と記されており、表紙裏には同じく西夏文字の二行があり、「安治元年墨縁堂ヨリ再ヒ印行」と読めるが、具体的に何時どこから発行したのかわからない。(おそらく1933年再版増訂本であろうか?) 2頁の序文の最後は宣統甲寅九日晦日上虞羅福菴(1914年)と結んでいるので、初版本の序文をそのまま使っているものと考えられる。『西夏国書略説』の版の移りと内容の改訂増加は興味深いものがある。羅福成はのち『亜州学術雑誌』1-4期(1921-22年)で増補を行っている(未完)。

石浜純太郎は、1933年5月に京都大学の言語学談話会で行った講演「西夏語研究の話」(『東洋学の話』(創元社1943年所収))の中で、「羅氏兄弟の君美君楚の二君は……字書文法の簡単なもの等を作りました」¹⁹⁾と述べ、注19)では「近頃その内の「西夏国書略説」は羅福成の手によって増訂本が出ました」と書いている。その増訂本は、1933年刊と見るべきであろう。

ウイグル語の専家庄垣内正弘氏は、ウイグル木活字に関して興味ある説を筆者に語った。ウイグル木活字とよんでいるものは本来活字として造ったのではなく、既存の版木を切断して活用したものであると言う。

西夏の木活字についてもこの見方は十分当たっていて、華嚴経卷五末の題記にある西夏人の言う 𑖧𑖨𑖩 ndiŋ(上10) -s'α(平33) '碎字'(碎いた文字)の本当の意味は正に「版本をばらばらに碎いて造った文字」を的確に表現しているのではないかと考えるようになった。しかし、その題記では「碎字を彫せしめ」という表現をとっているから、すでに個々の木活字を造り出していたことになる。また史金波は卷四十にも2行の題記があるのを見つけ、その中にある選字出力者という表現は、揀字、排字工であったに違いないと言う。(上掲『文集』p. 387) 当時選字組版の専門職人がいたのは間違いないであろう。

碎字の名称の由来について付言しておきたい。

(にしだ たつお / 京都大学名誉教授)